

二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科
株式会社 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)

「漱石アンドロイド」プロジェクト 2019年度 共同研究報告書



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications
Research Institute International

Contents 目次

- 04 「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2019年度）
学校法人二松学舎 常任理事 西畑 一哉
- 08 2019年度研究教育活動の概要
二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
- 12 偉人アンドロイドをめぐる問題－人間の尊厳－
大阪大学大学院基礎工学研究科教授 石黒 浩
- 14 シンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？
漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」
二松学舎大学大学院文学研究科教授 島田 泰子
山口大学時間学研究所講師 小山 虎
二松学舎大学文学部専任講師 谷島 貴太
- 20 漱石アンドロイドの体験談による心理実験の実施
二松学舎大学文学部教授 改田 明子
- 22 夏目漱石の言葉をアンドロイドにのせて時代を超えて現代に届ける試み
大阪大学大学院基礎工学研究科特任講師 高橋 英之
- 24 国文学科学生がまなざす漱石アンドロイドー特別講義の実施ー
二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
- 26 三学会合同国際研究集会における英文朗読パフォーマンス
二松学舎大学大学院文学研究科教授 瀧田 浩
- 28 北陸の大学生は漱石アンドロイドをどう受け止めたか
ー富山大学での出張授業ー
二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
- 30 動詞「よみがえらせる」の特異性と、漱石アンドロイドの「物語」
ー共同研究プロジェクトの新展開ー
二松学舎大学大学院文学研究科教授 島田 泰子
- 32 アンドロイドとAI美空ひばり、
そしてゲームキャラクターとしての三浦大知
二松学舎大学大学院文学研究科教授 塩沢 一平
- 34 研究と教育のあわいー漱石アンドロイドサークルの記録ー
二松学舎大学大学院文学研究科助手 伊豆原 潤星
二松学舎大学大学院文学研究科助手 金子 亮太

「漱石アンドロイド」運用経緯と 研究の動向（2019年度）



学校法人二松学舎
常任理事 西畑 一哉

1. 漱石アンドロイドの作成経緯

二松学舎では、創立140周年記念事業として、二松学舎の卒業生であり、2016年に没後100年、2017年に生誕150年を迎えた夏目漱石を、アンドロイドとして甦らせる「漱石アンドロイドプロジェクト」を立ち上げた。本学が教育目標に掲げる「国語力」の象徴である夏目漱石をモデルに、大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、漱石のデスマスクや写真等多くの資料を保持する朝日新聞社、夏目漱石の孫である夏目房之介学習院大学大学院教授（アンドロイドの音声を作成するために不可欠な「音素登録」者）の協力を得て、漱石アンドロイドを作成し、2016年12月8日に完成し、披露の記者会見を行った。

2. 2019年度二松学舎内での漱石アンドロイドの活用

(1) 授業・式典等での活用

2019年度も、前年度に引き続き、大学・附属高校・附属柏高校・附属柏中学校の学生生徒を対象に、断続的に朗読講義、授業を実施した。

また、2019年10月10日には、二松学舎大学附属柏高等学校創立50周年・柏中学校創立10周年祝賀会に於いて、『草枕』の冒頭部分を引用しつつ、祝賀スピーチを行った。



二松学舎大学附属柏高等学校創立50周年・柏中学校創立10周年祝賀会の様子

(2) 英語によるスピーチが可能に（英語の音素登録を実施）

漱石アンドロイドの朗読プログラムについては、当初作成した「自己紹介」、「夢十夜」第一夜、「吾輩は猫である」、「坊っちゃん」、そして「私の個人主義」（かつて漱石が学習院で行った講演記録）、「論語と算盤」（渋沢栄一の著作の冒頭部分）が収録済みであったが、2018年には『こころ』、2019年には『夢十夜』第三夜などを追加した他、英語による音素登録・プログラム登録を実施した。これにより、漱石アンドロイドが英語によるスピーチを行うことが可能となった（夏目房之介氏に依頼して6日間に亘り終日英語音声の収録作業を実施していただいた。夏目房之介氏には大変なご負担をおかけしたが、本稿を借りて重ねて感謝の意を申し上げたい）。

2019年11月24日に本学で開催された日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会に於いて、漱石アンドロイドがウィリアム・シェイクスピアの『マクベス』の原文（第三幕）と夏目漱石のエッセイ「マクベスの幽霊に就て」の朗読・講演を行った。朗読対象となったマクベスのこの部分については、マクベス本人、マクベス夫人等と複数の登場人物が登場するが、ソフトに登録されている音声の音域や音速を複数段階に設定することによって対応したと

ころ、英米からの出席者からも「英語として聞き取りやすい」、「複数の録音もしくは音素登録者が居るように聞こえるなど真に迫っている」などといった声がきかれ総じて好評であった。

英語によるスピーチとしては、そのほかにも11月3日に本学国際交流センター主催の「国際交流の会」に於いて、漱石アンドロイドが学生に対し、夏目漱石の英国留学の経験の話を織り込んだ留学の勧めのスピーチを行った。

(3) 漱石アンドロイド研究会（アンドロイドサークル）の活動

2019年度も前年度に続き「漱石アンドロイド研究会（アンドロイドサークル）」の活動が一段と活発化した。アンドロイド操作や音声作成技術の習熟に努め、学生メンバーのみによる操作・運用が可能な体制を築きあげたほか、新たな朗読プログラムの開発・登録にも力を入れた。

2019年7月27日の松苓会（二松学舎大学同窓会）支部合同講演会では、『夢十夜』「第三夜」の講演をプロデュースし、研究会で音声及び動作プログラム作成を実施したうえ、会場を『夢十夜』「第三夜」の内容に合わせ蝋燭で照明を行うといった怪談風の設えにするなど工夫を凝らし、講演会を盛り上げた。12月には、研究会主体で「漱石アンドロイドLINEスタンプ」も考案した。

3. 外部との連携での活用

(1) 羽二重団子本店との共催（2019年5月18日）

2019年5月18日荒川区東日暮里の「羽二重団子」本店で、リニューアルオープンの特別イベントとして漱石アンドロイドによる講演を実施した。この店は『吾輩は猫である』にも登場する子規庵近くの団子屋で、作品内では「芋坂の団子屋」と記されている。この店の団子は正岡子規の好物で、夏目漱石も知ることとなったという縁があり、本店改装後には、文学との繋がりをコンセプトにしたお店としたいとのことであるため、協力したものである。

当日は漱石アンドロイド研究会所属の学生により、漱石アンドロイドのプログラムを作動させたほか、二松学舎大学の広報も実施し、来店者には極めて好評であった。



羽二重団子本店外観



朗読する漱石アンドロイド

(2) 深谷市「渋沢栄一アンドロイド制作発表会」への出席（2019年10月3日）

2019年7月に深谷市から副市長・教育委員長が二松学舎を来訪され、漱石アンドロイドの稼働状況や運用状況等を見学された。その後、深谷市では、郷里の偉人である渋沢栄一のアンドロイドを制作し、渋沢栄一記念館等で活用する計画を立て、10月3日には「渋沢栄一アンドロイド制作発表会」を開いたが、その記者会見に漱石アンドロイドが同席した。渋沢栄一アンドロイドは、同市出身の鳥羽博道氏（ドールコーヒー名誉会長）が制作資金を寄付、漱石アンドロイドと同様大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、株式会社エーラボが制作することとなった。

渋沢栄一は二松学舎の創立者である三島中洲と親しく、両者の対話から渋沢栄一の代表作「論語と算盤」が著されたほか、自身二松学舎の第三代舎長を務めており、二松学舎との関係は極めて深いものがある。こうしたことを背景に、二松学舎としては深谷市の渋沢栄一アンドロイド計画をサポートする観点から漱石アンドロイドの記者会見出席を行ったものである。

記者会見当日は、小島進深谷市長、寄付者の鳥羽氏、石黒教授らと共に、漱石アンドロイドが壇上に登り、渋沢栄一の「論語と算盤」について、二松学舎との関連も踏まえながら説明を行い、大変好評であった。



渋沢栄一アンドロイド制作発表会の様子

(3) TBS番組「世界ふしぎ発見!」に出演 (2019年10月26日)

TBS番組「世界ふしぎ発見!」を製作するテレビマンユニオンから出演依頼があり、2019年10月26日に全国ネットで放映された。この回の放送は「筋力トレーニング」をテーマにしたもので、夏目漱石の日記にも、かつて漱石が筋トレを行っていたと見受けられる記載「エキザササイサーをやる。四五遍。夜からだ痛し。」という一節があることを受け、実施したもの。テレビマンユニオンは2018年のNHKBS番組「天国からのお客さま」の製作会社でもある。



漱石アンドロイドの撮影風景など

(4) 富山大学での出張講義 (2019年10月31日) 及び北陸銀行「ビジネス・サミット2019」(2019年11月1日)での講演

富山大学人間発達科学部から招請を受け、富山大学五福キャンパス教室で、漱石アンドロイドの講演を実施した。講演は富山大学学生に極めて好評だったほか、地元新聞社でも記事に取り上げられた。

北陸銀行主催の「ビジネス・サミット2019」では漱石アンドロイドの講演を実施とするとともに、二松学舎大学のブースを設置してもらったこともあり、パンフレットの配布等二松学舎大学の広報にも努めた。

(5) 漱石アンドロイドシンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか? 漱石アンドロイドを巡る3つの視点」(2019年11月9日)

2018年の漱石アンドロイドシンポジウムでは「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか? 偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマでシンポジウムを開催し、夏目漱石との関係で「漱石アンドロイドの人格権」や「漱石アンドロイドにどこまで何を実施させるべきか」との議論が行われた。

2019年のシンポジウムは、漱石アンドロイドの「アンドロイド」としての部分に改めて焦点を当て、「アンドロイドに魂は宿るか? 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」とのテーマで実施した。

シンポジウムは脚本家の佐藤大氏(『攻殻機動隊 S.A.C.シリーズ』『交響詩篇エウレカセブン』等の脚本家)による漱石アンドロイドのモノローグからスタートした。漱石作品の本文からサンプリングしたスクリプトをベースにしつつ、映画「ブレッドランナー」でのレプリカントのモノローグを響かせ、アンドロイドとしての虚と実の狭間について語る、感銘深いものであった。

その後、菊地浩平氏(日本学術振興会特別研究員、早稲田大学非常勤講師)、大山顕氏(写真家)、前出の佐藤大氏らによるプレゼンテーションが、島田泰子氏(二松学舎大学教授)による前置き説明を皮切りに展開され、様々な角度から「アンドロイドとしての漱石」を巡る課題や分析考察が示された。それを受け、小山虎氏(山口大学時間学研究所講師、大阪大学石黒研究室招へい教員)、足立元氏(二松学舎大学専任講師)、夏目房之介氏(学習院大学大学院教授)も加わっ

での、活発かつ奥深い議論が行われた。

このシンポジウムでのモノローグは、漱石アンドロイド特設サイトに全編の映像が公開され、IT系メディアによるオンライン記事の中でも大きく取り上げられている（本稿末尾の注を参照）。また議論の様子は、現在、公刊を目指して取り纏め作業中である。本報告書の14ページ以降にまとめられたシンポジウムの意義やプロジェクト全体への位置付けなどと合わせて、これらの記録も参照されたい。



漱石アンドロイドモノローグ（上演記録映像より）



討論の様子（撮影・荻窪 圭）

以下、「漱石アンドロイド活動状況など」と「報道・テレビ・取材・出版関係一覧」を添付する。

2019年度 漱石アンドロイド活動状況など

目的	月	日	時間	訪問施設・内容など	場所
大学授業、サークル紹介	4	17	午後	授業、サークルの活動内容紹介	九段1号館 中洲記念講堂
		19	午後		
羽二重団子本店でのイベント	5	18	終日	自己紹介、『吾輩は猫である』朗読等	日暮里
五大学研修会	6	13	午後	自己紹介等	九段1号館 13階ラウンジ
松茶会支部合同講演会	7	27	午後	『夢十夜』『第三夜』、質疑応答等	九段1号館 中洲記念講堂
オープンキャンパス	8	18	終日	『夢十夜』『第三夜』、『吾輩は猫である』の朗読等	九段1号館 中洲記念講堂
		9	29		
渋沢栄一アンドロイド制作発表会	10	3	午後	挨拶、「論語と算盤」についての説明等	深谷市役所
附属柏高校・中学創立50&10周年祝賀会	10	10	午後	講演	柏クレストホテル
富山大学講演	10	31	午後	『こころ』の朗読	富山大学五福キャンパス
ビジネス・サミット2019	11	1	終日	開会スピーチ、司会者との掛け合い	富山市
国際交流センター主催留学フェア	11	3	午後	留学に関する講話	11階会議室
シンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？ 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」	11	9	11:00～	漱石アンドロイドモノローグ メディア向け披露会 ・漱石アンドロイドモノローグ上演 ・シンポジウム（講演、討議など）	九段1号館 中洲記念講堂
			13:00～		
日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会	11	24	終日	『マクベス』と漱石の「マクベスの幽霊に就いて」を朗読	九段1号館 13階ラウンジ
心理実験	12	19	終日	漱石の体験談の実験 主担当：二松学舎大学（改田教授）	九段1号館 13階来賓室等
心理実験（2020年）	2	23	終日	自己啓発に関連する実験 主担当：大阪大学（高橋先生）	九段1号館 8階教室

2019年度 漱石アンドロイド報道・テレビ・取材・出版関係一覧

月	日	時間等	新聞社・テレビ局等	タイトル等	内容
10	26	21:00～	TBS	「世界ふしぎ発見!」	筋トレ女子特集 VTR出演

※5月18日羽二重団子イベント、10月3日渋沢栄一アンドロイド制作発表会、10月31日富山大学出張講義、11月9日漱石アンドロイド関連シンポジウムについては、朝日新聞、読売新聞などのほか、富山新聞などの地方紙にも掲載され、ロボットスタートのWebサイト等でも紹介された。

2019 年度研究教育活動の概要

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



2019年度は、前年度に引き続き、漱石アンドロイドの研究教育分野での多角的な運用に努めた。

イベント開催については、新たな朗読プログラムを作成し、また、登壇機会をさらに開拓した。学内行事では、オープンキャンパス（8月18日、9月29日）で朗読を行い、また、文学部の特別授業に登壇した。羽二重団子本店リニューアルオープンにおける出演、富山大学の特別授業、国際研究集会での英文朗読パフォーマンスなど、外部の催しにも出演し、反響を呼んだ。

実験については、「夏目漱石」であることが被験者にどう作用するかをめぐって二つの心理受容実験を実施し、人型ロボットが人に与える影響を客観的に測定した。また、理論的な考察をいっそう深めるため、シンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？」を開催した。

論文としては、高橋英之、伊豆原潤星、改田明子、山口直孝、境くりま、小山虎、小川浩平、石黒浩「文豪アンドロイドに感じるリアリティと事前知識・信念の関係性の検討」（『知識と情報』2019年10月）、伊豆原潤星、瀧田浩、山口直孝「夏目漱石が『こころ』を朗読する時——アンドロイドによる文学教育の試み」（『二松学舎大学人文論叢』2019年10月）、増田裕美子「アンドロイド・AIと人間」（『文学・語学』2019年5月）などを得た。

有志学生による漱石アンドロイド研究会は、音声プログラムの開発、イベントの企画運営、広報活動などに取り組んで成果を挙げ、アンドロイドに関する理論的考察も手がけた。

さまざまな取り組みを通じて、漱石アンドロイドの認知度がさらに高まり、人々への作用についてもより具体的に把握することができたと思われる。大阪大学大学院基礎工学研究科と二松学舎大学大学院文学研究科との学際研究は、着実に成果を挙げていると評価できる。

以下、項目別に2019年度の活動を概説する。

①、受容実験の実施

漱石アンドロイドを用いた受容実験を二種類実施した。一つは、改田明子二松学舎大学教授主導のもの、もう一つは高橋英之大阪大学特任講師主導のものである。

改田明子教授の実験では、「私の個人主義」の抜粋（ロンドン留学の苦勞と自己本位の発見）の朗読を聞いてもらい、漱石アンドロイドが語る条件とほかの男性が朗読する条件とを比較した。実験案は、2017年度から検討されてきたが、自然な自己語りとなるよう、音声プログラムを調整することと比較条件の策定とに時間を要し、2019年度の実現となった。実施日は、2019年12月19日、実験会場として、二松学舎大学九段キャンパス1号館13階ラウンジおよび来賓室を利用し



心理受容実験（2019年12月19日実施）

た。被験者は、二つの条件で計60名で、二松学舎大学の学生が主であった。朗読を聞いてもらう前後にアンケートを実施し、心理変化の可視化を試みた。漱石アンドロイド条件が朗読条件よりも状況モデル構成が促される、という仮説を立てていたが、結果は概ね仮説に沿ったものであった（本報告書20～21ページ参照）。

高橋講師の実験は、「偉人」イメージを持つ漱石アンドロイドの発言が被験者に積極的に解釈されるのではないかとという仮説に基づくもの。被験者に悩みを提示してもらい、「どんなオリジナルの人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません」（講演「模倣と独立」の一節）という言葉聞かせて、どのように受け止めたかを調査した。いずれの被験者にも、同じアドバイスを示すことで、創造的な解釈の作用を見きわめるのが実験の主眼である。比較条件として、小型ロボットCommUの語りを設定した（CommUの利用については、大阪大学吉川雄一郎准教授の協力を得た）。実施日は、2020年2月23日、二松学舎大学九段キャンパス1号館8階教室を利用した。被験者は、公募により、CommU条件に臨んでもらった。被験者の反応は、概ね想定範囲に収まるものであった（本報告書22～23ページ参照）。

高橋講師の実験は、漱石アンドロイド条件も続けて行う計画であったが、新型コロナウイルス感染拡大という予想外の事態が起こったため、やむをえず実験および分析は、次年度に延期することとなった。改田明子教授の実験の分析についても同様である。

②、シンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？ 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」の開催

2019年11月9日に、大阪大学大学院基礎工学研究科と二松学舎大学大学院文学研究科との共催で上記のシンポジウムを二松学舎大学九段キャンパスにて開催した。催しは、二部構成、「オープニング・アクトの部」では、脚本家の佐藤大氏が書き下ろしたモノローグ劇、「Variable Reality（ヴァリアブル・リアリティ）——虚構は可変現実」を上演した。続く「トーク・セッションの部」では、島田泰子（二松学舎大学教授）「文豪模型に「だが断る」とか言われる日」を皮切りに、菊地浩平氏（早稲田大学非常勤講師）「「中の人」と「生きてるみ」一人形論から見た漱石アンドロイド」、大山顕氏（写真家）「写真論から見たアンドロイドの顔の問題」、佐藤大氏「脚本から考える歴史的人物の虚構化で描く現実」の発表があり、小山虎氏（山口大学講師）、夏目房之介氏（学習院大学教授）、足立元（二松学舎大学専任講師）を加えて討論が行われた。

人工物であるアンドロイドは、一つの「人格」を与えられることで自律的な存在となっていき、作り手、あるいは受け手としての人間にも作用を及ぼしていく。影響は、虚構／現実、ロボット／人間、対象／主体など、従来の思考の枠組を揺さぶる強度を備えている。漱石アンドロイドの運用を通じて得られた知見を踏まえ、シンポジウムは、人型ロボット、とりわけ偉人アンドロイドの可能性を理論的に検討するために企画された。境界線を問い直す試みであるため形式にも工夫を凝らし、一方向的に主張が展開されるのではない、参加者も含めて双方向的、多方向的なやり取りが可能な空間を作ることを心がけた。

漱石アンドロイドは、作りものでありつつ、生きた存在でもあると受け止められている。複数の文脈を引き受けることで創造性を増していることが、人間の認識の両義性と共に確認されたことでシンポジウムの意義は大きかったと言える。聴衆の反応もよく、シンポジウムは、催事としても実りあるものであった。なお、「Variable Reality」の動画は、現在特設サイトで公開されている（本報告書14～19、36～37ページ参照）。

③、羽二重団子本店リニューアルオープンイベントへの出演

東京都荒川区東日暮里の老舗団子店、羽二重団子本店が2019年5月18日にリニューアルオープンしたのを受けて、デモンストレーションを行った。1819年創業の羽二重団子は、正岡子規や田山花袋などの文学者も愛好し、夏目漱石も食したと言う。今回の出演は、漱石ゆかりの地を訪れる初めての試みであった。

漱石アンドロイドは、自己紹介の後、羽二重団子への言及がある『吾輩は猫である』の一節を朗読した。デモンストレーションは、1回約20分で7回行った。客足が途絶えなかつたため、合間にも記念撮影に応じたり、手を振ったりするなど対応に努めた。操演は、アンドロイドサークルの学生が担当した。

家族連れを始めとする幅広い年代層を含む客の反応はよく、「漱石」との出会いを楽しんでいた。デモンストレーショ

ンを知らずに店を訪れた人も少なくなかったが、途惑いはほとんど見られなかった。学生以外の層の反応に触れることができたことや漱石アンドロイドの知名度を上げるよい機会となったことなどが、収穫として挙げられる。さらに、団子屋という空間がデモンストレーションを行う上で広さや雰囲気理想的であることを認識できた点でも成果があった。夏目漱石ゆかりの地訪問という催事を継続していく上で、一つの雛型を作ることができたと言える（本報告書34～35ページ参照）。

④、オープンキャンパスでの講義

夏のオープンキャンパスで二松学舎大学特別教授として、2019年8月18日、9月29日に講義を行った。昨年度に引き続いての実施で、自己紹介および作品朗読が内容の中心である。8月18日は、『吾輩は猫である』、9月29日は、『吾輩は猫である』、『夢十夜』『第三夜』を取り上げた。いずれも、新しいプログラムである。企画、操演、運営はアンドロイドサークルの学生が担当した。

二松学舎の顔として認知されていることを受けて、2019年度のオープンキャンパスでは、漱石アンドロイドの登壇が行事の中心に据えられ、他の催しとの重複が避けられた。また、解説の時間を設けるなど、学生たちが主体的に取り組んでいることを伝えることに留意した。照明や小道具など、技術的な工夫も含めて、デモンストレーションの質は、さらに高められていた。新たに設けた撮影コーナーも好評であり、アンケートの反応も概ね肯定的であった。漱石アンドロイドの魅力と学生の自主性とを印象づける効果があったと思われる（本報告書35～36ページ参照）。

⑤、文学部学生への特別授業

2019年4月17日および19日に文学部国文学科1年生を対象に特別授業を実施した。必修科目である「日本文学概論A」の時間を利用し、「日本文学講読入門①（夏目漱石）」への導入を企図したものであることは、2018年度と変わらない。紹介映像の後に、漱石アンドロイドを登場させ、自己紹介および『こころ』の朗読を行った。前年度より進行は洗練され、受講生も作品を読む声に聞き入っていたようである。学生による『こころ』の解説、アンドロイドサークルの紹介を経て、基礎ゼミナールごとの記念撮影で締めくくった。年度初めに実施したこともあり、2018年度と比べて、受講生の反応は好意的なものが多かった。特に撮影が盛り上がりを見せ、自由時間に個別の写真撮影の事例が相次いだ。

アンケートからは、国文学科学生の漱石に関する知識が総体的に多く、漱石アンドロイドの語りや姿に触れることで想像力を刺激され、関心が高まる傾向が見受けられた。アンドロイドサークルへの入会者が10人以上あったことも、反響としては見逃せない。講義と催事とが重なっており、受講生が娯楽として受け止めている面があることは否定できないが、楽しい体験を提供したことに、従来の講義とは違った可能性が芽生えていると考えられる（本報告書24～25ページ参照）。

⑥、富山大学での出張講義

2019年10月31日、富山大学五福キャンパスで出張講義を行った。本講義は、ビジネス・サミット2019における登壇（11月1日）と連動して企画されたもので、富山大学人間発達科学部西田谷洋教授の協力によって実現したものである。西田谷教授担当の「日本文学概論」（受講者約60名）の一講時を利用し、「漱石アンドロイドと学ぶ日本文学」と銘打った。

語りについては、自己紹介から『こころ』朗読へという、二松学舎大学での講義の骨格を踏まえながら季節や場所に即した文言を加えた。事前に受けた受講生の質問への答えや西田谷教授の解説に対する感想も盛り込み、場を和やかにすることを狙った。アンドロイドサークルの学生2人を引率し、操演と司会とを担当してもらったほか、終了後の富山大学生との意見交換にも臨んでもらった。

他大学での講義は初めてであり、比較考察の機会が得られたことは大きい。富山初のお目見えでもあったことでマスコミの注目も高く、複数の地元紙が報道した。漱石アンドロイドの受容において、地域性にも留意する必要に気づかされた点でも収穫があった（本報告書28～29、36ページ参照）。

⑦、日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会での英文朗読パフォーマンス

2019年度に、英語による人工音声制作を行い、漱石アンドロイドは英語の発話が可能になった。英文学研究者であった漱石の講義を再現する上でも、また、より多くの受容層を開拓するためにも、新しいプログラムの搭載は、待望されて

いたものである。英語スピーチを初披露する場所として、人文系の学会を選んだ。日本近代文学関連の三学会初の共催による国際研究集会は、理想的な舞台であると言えるであろう。

漱石アンドロイドは、自己紹介と「マクベスの幽霊に就て」の朗読とを行った。大学での講義に基づく、シェイクスピア劇をめぐるエッセーは、戯曲からの引用を含み、英文プログラムを用いるのに恰好の題材である。研究集会の関連企画として会場を二松学舎大学九段キャンパス1号館13階ラウンジに設け、4回のデモンストレーションを行った。



三学会合同国際研究集会における英文朗読パフォーマンス

個人発表、パネル発表の分科会と並行しての開催であったため、回によって参加者数に異なりが生じたが、いずれの回も賑わい、特に4回目は用意した座席が埋まる盛況ぶりであった。海外の研究者の姿も多く、漱石アンドロイドの精巧な造りや語りに驚きの声も漏れていた。英語プログラムは、日本語よりも音の高低差がつけにくいという技術的問題があったが、スピーチは不自然さを感じさせないでよかった。日本近代文学研究者が集う場所でデモンストレーションを行うのも初めてであったが、専門家の間でも否定的な反応は見られず、総じて好意的な反応が多かった（本報告書26～27、37ページ参照）。

⑧、アンドロイドサークルの活動

漱石アンドロイド研究会（通称アンドロイドサークル）は、教員の教育活動や大学の広報活動と連携しながら独自の活動を行う学生の集まりである。伊豆原潤星研究助手、金子亮太研究助手の指導の下、さまざまな課題に取り組んだ。2019年度は、所属員も増え、豊富な成果を出すことができた。

音声プログラムは、『吾輩は猫である』、『草枕』、『夢十夜』「第三夜」、「マクベスの幽霊に就て」などを新たに作成した。挨拶はその都度作り、自己紹介も細かな修正を加えた。作業に熟達し、催事の進行中に新たなせりふを追加することにも対応できるようになった。動作プログラムについても、経験を重ねることで担当者が熟練し、待機中の視線や動作で人らしさを感じさせることができている。性能面での限界を操作技術で補っていること、また、操作対象と操作者との身体的同調が観察される点でも、技能の向上は見逃せない。

オープンキャンパス、特別授業などの学内における行事、羽二重団子本店や合同国際研究集会のスピーチなどの学外での催事の多くは、アンドロイドサークルが運営に携わった。現在は学生だけでも進行が可能な水準にある。学生が手がけることは、参加者に訴えかける力を高め、大学の広報活動としても意義を有していると言える。

ほかに、漱石アンドロイドを紹介するリーフレットやパネルを作り、オープンキャンパスの際に展示を行った。イラスト入りポストカードやLINEスタンプなども新たに作り、アンドロイド本体との複合的な効果で知名度を上げていくことを図った。LINEスタンプは、漱石アンドロイドの人物像に反映する要素を持っており、今後の相互作用が注目される。

文学部に所属する学生が多い特性を活かして、2019年度は、アンドロイドをめぐる論集『鏡像』を編集発行することにも挑んだ。『鏡像』は、論文5編、コラム5編を収録し、デザインや組版もサークルが手がけ、文学フリマで頒布した。創作を対象としながら、漱石アンドロイドと向き合うことで得られた知見が随所に織り込まれているところに、人文研究としての斬新さがある（本報告書34～37ページ参照）。

偉人アンドロイドをめぐる問題 —人間の尊厳—

大阪大学大学院基礎工学研究科

教授 石黒 浩



AI美空ひばり

昨年のNHK紅白歌合戦に登場した、コンピュータグラフィックスで再現された美空ひばりさんは、AI技術によって新しい歌を披露したが、この取り組みは賛否両論を巻き起こした。感動したという人もいれば、故人に対する冒涇だという人もいたのである。このAI美空ひばりに関する様々な意見を参考しながら、改めて偉人アンドロイドをめぐる問題、特に、人間の尊厳について考えてみようと思う。

まず、AI美空ひばりについてであるが、これは実空間に存在する実体のあるアンドロイドではなく、コンピュータグラフィックスである。そして、重要なのはAI技術によってまだ歌ったことがない歌、本人がもし今歌うならどんな歌を歌うだろうかと想像して作られた歌を歌ったことである。歌の途中には短い台詞も入っている。

このAI美空ひばりに対する肯定的な意見は、本人が蘇ったようだ。本人の歌う歌に感動したというもので、一方で否定的な意見は、蘇らせて新たな歌を歌わせるのは故人に対する冒涇である。歌をAIで作るのは音楽に対する冒涇である。というようなものであった。

人間の尊厳

では、どういったことが故人に対する冒涇になるのであろうか。この問いに答えるには、人間の尊厳について改めて考え直す必要がある。

人間の尊厳とは一体どのようなものであろうか。尊厳とは大辞泉によれば「尊く厳かなこと。気高く犯しがたいこと」という意味である。その定義に従えば、人間の尊厳とは、人間の尊く厳かなもの。人間の気高く犯しがたいものということになる。そうなると、人間を定義せずに、その尊厳を議論することは難しい。すなわち「人間とは何か」という問いに答えながら、人間の尊厳を説明する必要がある。しかし、無論のことその答えを容易に引き出すことはできない。人間にとって最も重要かつ最も難解な問いである。

しかし、それでも人間の尊厳についてある程度の理解を持ち、その理解に基づいて、AI美空ひばりや同様の問題を持つであろう、偉人アンドロイドについて考えてみたい。そこで、尊厳の定義の中で「犯しがたい」という部分に注目してみようと思う。犯すことを、ここでは勝手に改ざんするという意味に捕らえる。すなわち、その人間の許可無く勝手に改ざんしてはいけないものが、その人間の尊厳と考える。

人間の尊厳をそのように考えたときに、犯してはいけないものは何かと思えば、それは、その人間の人格が思い浮かぶ。ここで重要なのは、人間は生きている限り変化し続けるということである。生きている人間に対して、その人格を否定するようなことをしても、その人間はそれを糧により理想的な人格を持つようになるかもしれない。生きている人間は非常に適応的で犯しがたい。

しかし、一方で、亡くなった人間については話が違う。その人間が亡くなっている場合、その人間の人格を定めるのは、その人間の亡くなる前の活動やその活動に関する周囲の者の記憶である。それを改ざんする、すなわち、コンピュータグラフィックスやアンドロイドでその人間を再現し、記憶とは異なる活動をさせることは、その人間の尊厳を犯す可能性がある。故に、亡くなった人を、コンピュータグラフィックスやアンドロイドで再現する場合には、人間の尊厳について慎重に検討する必要がある。

アンドロイドによる故人の再現

夏目漱石アンドロイドのプロジェクトでは、ほとんどの場合、夏目漱石アンドロイドは、自らの文学作品等に基づいて発話している。それ故に、夏目漱石の人格を改ざんし、尊厳を冒していることにはならないと考える。

しかし、AI美空ひばりは、美空ひばりが歌ったことがない歌を、美空ひばりとして歌っている。無論、それはコンピュータグラフィックスであり、AIによって実現されたと説明されているのであるが、今後の技術がさらに発展すれば、どんどんと新しい歌を歌い、新たな美空ひばりとして自律する可能性も出てくる。

そうしたAI美空ひばりを見て、美空ひばりが蘇ったと感動する人もいれば、私の知っている美空ひばりと何か違うと、その存在に疑問を感じる人もいるだろう。

では、コンピュータグラフィックスやアンドロイドで、故人を再現した場合、それらは、どれ程、もとの故人と似ている必要があるのだろうか？ 残念ながら完全に故人を再現することは困難で、どこか違ったものになる。

最近では記録メディアが発展しているので、本人の映像が残っている場合が多く、その映像を基に再現すれば、かなり正確にその人物を再現できる可能性はある。しかしその人間のあらゆる活動を再現することは不可能で、特定のシーンを選ぶことになる。そして、そのシーンの選び方に偏りがあると、偏った人格を再現してしまう危険性がある。

偉人アンドロイドの開発に関する個人的見解

私個人的見解としては、そのコンピュータグラフィックスやアンドロイドが、もとの故人と異なることが明確に示されているなら、それらが自律的に活動し、例えば新たな歌を歌うようなことがあってもよいのではないかと考える。むしろ、1台のアンドロイドを造るのではなく、その故人の様々な側面を反映した複数のアンドロイドを作り、その偉人の様々な側面を基に、様々な人に影響を与えてもいいのではないかと思う。複数のアンドロイドより、その偉人が亡くなった後も、複数のアンドロイドを通して偉人の教えがより広く、伝えられるのである。このような社会も、科学技術がもたらす可能な未来社会の一つであると思える。

故人の尊厳を守ることは重要である。故人の尊厳は、そのコンピュータグラフィックスやアンドロイドが故人本人と異なることを明確に示すことで守ることができる。一方で、コンピュータグラフィックスやアンドロイドによって、故人はさらに社会の中で成長し、より多くの影響を社会に与えて行くこともできる。

シンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？ 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」



二松学舎大学大学院文学研究科
教授 島田 泰子



山口大学時間学研究所
講師 小山 虎



二松学舎大学文学部
専任講師 谷島 貫太

1. 本年度シンポジウム実施概要と各種記録物ほか関連情報について

本年度のシンポジウムは、2019年11月9日（土）午後、二松学舎大学中洲記念講堂において、二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科の共同開催で行われた。プレゼンターとして脚本家の佐藤大氏、写真家の大山顕氏、人形論研究者の菊地浩平氏（早稲田大学）の3名、コメンテーターとして大阪大学側「共同研究」メンバーの小山虎氏（現・山口大学）、プロジェクト協力者である夏目房之介氏（学習院大学）の2名をそれぞれ迎え、二松学舎大学から聞き手として足立元、司会進行役として企画者島田泰子の2名が登壇した。

シンポジウムの開催については、本報告書p.6ならびにp.9にも言及があるが、以下、改めて、当日の様態や実施の意義ならびに位置付けなどに関して、振り返りと総括を行う。なお、企画の礎をなす問題提起や各登壇者の紹介などは、特設サイトのイベント案内ページ（注1）に詳しい。また、特設サイトに公開されたモノログの全編映像作品、フロアから行われたイベント中継ツイートのトゥギャッターまとめ（注2）、当日の取材を経たITメディアのイベント紹介記事（注3）なども、本稿の内容を補完するものとして合わせて参照されたい。

2. 企画の趣旨と狙い、プロジェクト全体における位置付け

「甦らせる」「権利」をキーワードに掲げた前年度実施のシンポジウムを踏まえつつ、そこで積み残したさまざまな問題について深く掘り下げることが、まずは今年度シンポジウム実施における1つめの狙いであった。あわせて、より自由闊達な発想と着眼に基づき、漱石アンドロイドに見出されるさまざまな側面に光を当てながら、議論の精度をあげてその本質に迫ることを、2つめの狙いとしていた。このため本シンポジウムでは、議論の“補助線”となる視点を与えるものとして、人形論、写真論、物語と脚本、実在モデルと創作、虚構と現実、パロディ、模型などといった多岐にわたる発題が用意され、プロジェクトの内外から招聘した登壇者、アカデミズムの枠組を超えて創作や表現の現場からも登壇いただいた論客たちによって、多軸・多焦点の闊達な議論が展開された。

イベントのオープニングアクトとして上演された漱石アンドロイドによるモノログ作品のあと四時間近くにわたって展開されたシンポジウムは、真剣かつホットな議論が交わされながらもエンターテインメント性の高い痛快なトークショーとなり、しばしば場内に大爆笑が巻き起こる盛り上がりぶりであった。そのような中、登壇者たちが口にした重要なフレーズを厳選してあげるなら、「テクノロジー付度」「エントリーモデル」「虚構リテラシー」の3つに尽きるだろう。いずれも漱石アンドロイドをめぐる諸問題を的確に捉え端的に示すパワー・ワードであり、今後のアンドロイド活用のあり方を考え



トークセッション：笑顔を見せる登壇者たち（撮影・荻窪 圭）

るのに重要なヒントとなるものであった。

本企画の背景には、これまでの本「共同研究」プロジェクトを通じて見えてきた諸々の困難や限界といった制約を超えて、より良いアンドロイド活用の方向性を模索したい、との切実な事情があり、例えば文豪を「偉人」として扱いその「銅像」相当のもの（「動く銅像」）とするような既定路線への拘泥あるいは付度を捨てて、どこまで健全な批判精神に基づく「忌憚のない議論」を戦わせることが出来るか、といったシビアな課題も伴われていた。漱石アンドロイドの存在とその価値や意義について観察と記述・考察の解像度をあげようとするれば避けられない課題であったが、そういった果敢なクリエイターこそ、本来は人文学の“命”であり「研究」にも必須の基本姿勢であることが、本シンポジウムを通じて改めて示されるかっこうとなった。人文学と工学とが協働するこの「共同研究」プロジェクトの活性化につながるカギとなるのは、一方の側で「人文学を死なせない」ことによって、制約や限界もある「漱石アンドロイドを生かす／活かす」こと、表裏をなすこの2つに尽きよう。従来の漱石アンドロイド研究のスタンスからゆるやかに“舵を切る”なり、漱石アンドロイド自身が“芸風を広げる”なり、新たな挑戦の余地がまだまだある、ということを示し得た点で、本シンポジウムはこの共同研究にとってひとつのエポックとなる企画であったと言える。

3. モノローグ「Variable Reality ー虚構は可変現実」での試みとその成果

オープニングアクトとして制作・上演された、漱石アンドロイドによるモノローグ（独白）形式での一人芝居についても、ここで振り返りに紙幅を割きたい。昨年度のシンポジウムで上演された平田オリザ氏×青年団による「手紙」に続き、漱石アンドロイドを用いた「アンドロイド演劇」として、本作は第2弾の取り組みとなる。登壇者としてお迎えした佐藤大氏が脚本を手掛け、そのセリフ部分をTTS（text to speech）ソフトにより合成音声に変換したのは、イベント企画者の島田泰子（AI TALK4を使用。合成音声生成後のピッチ修正は、一切行っていない）。アンドロイドの動作や表情をコントロールするプログラムの作成と上演時の「操演」を担当したのは二木潤。スポットライト2台の操作を佐々木晴香、演出上の

補助業務を桑原侑己が、それぞれ務めた。二木・佐々木・桑原の3名は、学生アンドロイドサークル所属の二松学舎大学在学学生である（本報告書p.36も参照）。

脚本は、生前の漱石本人が書き記した文面（主に『夢十夜』『三四郎』）から、音楽における「サンプリング」の手法にのっとって得られたテキストの断片をベースとしており、部分的に創作が混じるそれらを、アートにおけるコラージュさながらに再配置して、そこに新たな意味合いと文脈性を持たせながら、観客側の受け止め方によってメッセージ性とストーリー性を生じさせるという作りになっている。一人芝居と見せかけてそばにいる「見えない共演者」との掛け合いをおろこみ、映画「ブレッドランナー」を原典とするギミックなどハイコンテキストな仕掛けもひそかに仕込まれていて、一見、難解で観る者の心にとまどいを呼ぶ。その反面、繰り返し鑑賞して反芻したくなる深みと妙に尾を引く後味が、独特の感銘をもたらす。

観客に向けてのさまざまな問題提起は、多岐にわたる——「写真」「記憶」による自己同一性、「顔」の変容と不変、アンドロイドの自律的自我、夢と現実、現実と虚構、人間をめぐる存在認識、生と死、そして、誰でもない「のっぺらぼう」なアノニマスとしての「自分たち」と「おまえたち」。「夢十夜」にひとつ付け加える「贗作の夢十一夜」と称するこのモノログを受け、観客が次に語る「第十二夜」を問うかたちで、作品は「劇終」を迎える。作品における重要なモチーフである「顔」の変容／不変、ならびに「マスク（覆面）」の匿名性、そして「生と死」という3つの項目が「写真」という小道具と合わせて他の登壇者のプレゼンテーションと見事な一致を見せたのは、示唆に富む偶然であった。後述の「生きてるみ」と合わせて、シンポジウムのテーマに沿って各自が用意した細部がすべからくして相互に符合し議論が噛み合い、有機的に統合されていく…という希有な企画の一翼を、この脚本もまた大いに担ったと言える。



大山頭氏プレゼン：マスクで匿名性を獲得するデモ参加者から考える、「顔」の固有性と個人の識別（撮影・荻窪 圭）

上演にあたっては、舞台上で椅子に座る漱石アンドロイドの背後に、脚本そのものをト書き含めてまるごと「文字のみで」スクリーン投影するという、大胆に簡素化した演出方法が採られた。BGMやSEも無し、一切の虚飾を徹底的にそぎ落とされた演出により、脚本の内容そのものと、漱石アンドロイドが放つセリフ、そしてかすかな表情とわずかな動きに、観客の全ての注意が注がれる——極めて地味な作品ながら、それに耐えられるクオリティが、モノログ作品を構成する

全要素に要求される、かなりタフなチャレンジであった。実際に上映されたモノローグの様子は、公開された全編映像をご覧ください。

従来の講演や対面実験などでセリフ音声の合成を手掛けるTTSソフト利用者たちとは、作業手順含め根本的に異なる技術と知識を用いることで、本モノローグでは、合成音声につきまとう「不自然さ」を極力排除した。観劇を終えた来場者から、夏目房之介氏の朗読（の事前録音）を使ったものと誤認したという反応が複数寄せられたのは、それを反映している（注3の記事にも言及あり）。また、二木氏による繊細で秀逸な操演は、セリフの内容に一致させて、うんざりしたような八の字眉毛の困惑顔、自らを納得させるようなかすかな頷き、空のかなたを見遣って「遠い目をする」演技など、これまでとは大きく異なる方向性が試みられた。さらに、二木氏による操演はモノローグの間にとどまらず、トークの部においてもイベント終了時まで熱意を持って続けられ、発言者のほうを注視してたまに深く頷いたり、時に退屈そうに客席を見回し来場者と目が合えば手を振ったり…と、実に「表情豊かな」様子を見せた。来場者の中継ツイートの文面やそこに添えられた写真を通じて知られるそれらの様子は、「中の人」である操演者によって、まさに「アンドロイドに魂が宿った」ような効果すなわち「生きてるみ」をもたらし、シンポジウムのタイトルや登壇者の発題などを通じて提起された問題とも深く関わる点で、これまた重要なものであった。（以上、島田）



イベント中、スタッフと会釈を交わす漱石アンドロイド（撮影・荻窪 圭）

4. 何のためのアンドロイドか—実物の「再現」と「逸脱」

大阪大学側の観点で見た今回のシンポジウムの注目すべき点は、アンドロイドを実物に近づけることの問題点があったことである。アンドロイドの研究開発では、人間そっくりのロボットというアンドロイドの規定からして、モデルとなる人間（漱石アンドロイドの場合は夏目漱石本人）に可能な範囲で近づける（要するに再現する）ことが当然視されている（モデルのいないアンドロイドの場合でも、いかに人間らしくするかが目指されるという点では変わらない）。周知のように、漱石アンドロイドの場合、残された資料等の関係で、工学的手法で実物に近づけることができない要素もある。例えば音声は、親族である夏目房之介氏の音声で代わりに用いられているが、これは工学的な意味では再現とは言えない。亡くなって久しい故人については実物との比較ができないため、どれだけ実物に近いかが示されえないからである。その代わりに、いわば「人文学」的な意味で実物に近づけているのである。とはいえ、これは単に資料（デー

夕) 不足によるというだけであり、漱石アンドロイド(あるいは「偉人」アンドロイド)ならではというものではない。それに対し、前年度のシンポジウムで論じられたことの一つは、単に実物を再現するだけでは「偉人」アンドロイドとしては問題があるというものだった。つまり、「偉人」の場合、本人という原理的には物理的に計測可能なものではなく、世間のイメージのような曖昧模糊としたものに近づけなければいけないという工学的には極めて困難な課題があることが認識された。「基本原則」も、この課題の解決につなげるためのものであった。

しかし、いずれの場合も、何かに近づけることが目指されている点については変わりなかった。それに対し本年度のシンポジウムでは、人形、写真、脚本、虚構、パロディといった、従来はあまりアンドロイドに関連すると思われてこなかった参照枠により、実物からの逸脱こそがアンドロイドにとって本質的だという点が浮き彫りになった。興味深いのは、「アンドロイドは何の役に立つのか」という極めて工学的な発想からすれば、そう言わざるをえないという点である。そもそも実物を必要以上に再現することは、工学的観点からすれば誤りである(例として、気候変動シミュレーションでは気候の忠実な再現は目指されないことが挙げられる)。一般に工学では、問題となる現象をモデル化することにより再現ということが行われる。アンドロイドの場合、実物が存在するため、それを計測してモデル化するのが極めて自然に思われたのだが、むしろ実物をどのようにモデル化するかは目的に応じて検討すべき問題なのであり、偉大な業績で広く世に知られる「偉人」に対する世間のイメージもその中に位置付けることができる。

さらに興味深いのは、そのような実物からの逸脱は、伝統的に行われてきたということである。能や狂言、あるいは写真館で撮影された写真への不満、そして「なつぞら」と「いだてん」の比較からわかるのは、実物からの逸脱の必要性和そのための工夫は様々な場面でかねてから知られており、むしろどのように逸脱させるか(すなわち背景化されているはずの「中の人」の存在を垣間見せる「透け感」)が肝要だということである。おそらく、同様のことは、声優や2.5次元、情報技術が関わるものとしてはVTuberなど、本シンポジウムでは言及されなかった様々な場面で生じているのだと思われる。工学的観点からすればアンドロイドもこれらと同列に並べるべきだというのは、本シンポジウムによって初めて得られた展望だと言ってよいであろう。(以上、小山)



祖父と孫、居並ぶ二人の仕草が驚くほどシンクロする瞬間がしばしば見られたとの所感が、来場者から寄せられた(撮影・荻窪 圭)

5. 漱石アンドロイドに「魂」を宿す

「魂」という言葉がタイトルに掲げられた今回のシンポジウムでは、甦らせる「権利」という前提条件を整理した前回から大きく踏み込んで、実際に「甦らせる＝魂を宿す」ための条件が検討された。ここで「魂を宿す」という表現で述べられているのは、漱石アンドロイドというモノの制作というレベルを超えて、そこに誰か（漱石なのかはたまた別の何者なのか）がたしかに存在するという主観的な経験が生み出されるという事態である。その検討を通して導き出されたのは、きわめてアイロニカルな結論であった。

一方において強調されたのは、甦らされた魂に対するある種の醒めた距離感である。技術装置が用意した設定に参加者が「あえて」乗っかっていくという事態を示す「テクノロジー忖度」という言葉や、虚構を虚構として適切な距離感で享受していく能力を示す「虚構リテラシー」という言葉は、こうした距離感の必要性を指摘するものであった。多くの人たちは、「ここに漱石が甦りました!」というベタな演出に素直に乗られるほど純朴ではないということだ。このことは、一見すると甦らされたはずの魂にとって危機のようにもみえる。

しかし、シンポジウムを通して他方で浮かびあがっていったのは、そうした一定の醒めた距離感が、漱石アンドロイドに魂が宿るという事態と両立してしまうという事実であった。むしろ、これはあくまでもパロディなのだ、虚構なのだという距離感があることがかえって、漱石アンドロイドが不意に魂をもってあらわれてくる瞬間を用意していたようにさえ思える。そこには、社会学者が「アイロニカルな没入」と呼ぶような事態が垣間見えるのだ。

むしろそれには条件がある。それは語弊を恐れずに言えば、作り込まれた演出であり繊細な操演である。漱石アンドロイドに語らせる言葉、その微妙なイントネーションや間、登壇者の発言に首をかしげるわずかな動き、視線のゆらぎ。こうしたすべてが丁寧に練り上げられていくことで、アイロニカルな距離感のただなかに、漱石アンドロイドが魂をもって現われてくる瞬間が成立する。それはあくまでも作られたものなのだと分かった上で、それでもわたしたちは魂の出現に「乗っかる」ことができるのだ。

わたしたちの社会には、さまざまな「人のようなモノ」、「魂をもっているかのようなモノ」が登場してきており、おそらくその傾向はこれからますます強まっていくだろう。こうした状況のなかで、魂現象をどのようにマネージメントしていくのかという問題は、現代社会においてきわめて実践的な課題となっていくように思われる。漱石アンドロイドのプロジェクトには、この新たな課題に本格的に取り組んでいくための先駆けという側面もあるのだ。(以上、谷島)

注1 <https://www.nishogakusha-u.ac.jp/android/event/20191109.html>

注2 <https://togetter.com/li/1482256>

注3 <https://robotstart.info/2019/11/10/souseki-android-mono.html>

〔付記〕 なお、本シンポジウムの内容については、実施後のさらなる議論の展開も含めて書籍化し刊行する準備が現在進められている。

漱石アンドロイドの体験談による 心理実験の実施



二松学舎大学文学部
教授 改田 明子

漱石アンドロイドは、身体性を備えたアンドロイドとしてすでに現存しない夏目漱石を再現しようとする試みである。本稿では、漱石アンドロイドの教育場面での活用の可能性を探るために、メッセージの媒体としての漱石アンドロイドの特性を探索的に検討した心理実験を報告する。使用するメッセージとしては、再現された漱石という漱石アンドロイドの特徴を踏まえて、漱石の体験談を取り上げた。本人によって語られる体験談がそれを聞く人に大きな影響力を持つことは周知のとおりである。漱石アンドロイドによる体験談は、漱石の主観的体験の理解を促進するだろう。また、目の前に語り
の主体が存在する状況を作ることによって、漱石から聞き手へ向けられたメッセージとして体験談が受容されやすくなることも想定できる。そして、そのようなメッセージとしての理解は、聞き手がそれを自己の経験と結びつけて推論を展開する状況モデルの成立を促すだろう。以上のような可能性を検討するために、実験を行った。

1. 方法

【実験協力者】 アンドロイド条件 33名 朗読条件 27名 (いずれも、大学生および大学教員)

【材料】 漱石アンドロイドの語りの内容は、「私の個人主義」の一部をもとに作成された。内容は、「自分は人に勧められるままに教師になり英国留学までしたが、いくら勉強しても文学がわからず、^{ふくら} 囊の中に詰められて出ることのできないような不安な気持ちで過ごしていた。そして、たくさん本を読んでも何もわからず、結局文学とは何かを自分で考えて作りあげるほかないのだと気づき、自己本位という言葉を手にして、自分の進むべき道を見出した。その時、自分の不安は全く消えていた。」というものであり、所要時間は約7分間である。

【手続き】 実験は、いずれも4〜7名の集団で実施した。まず、実験協力者は、事前アンケートとして、漱石アンドロイド経験と興味・漱石作品経験・漱石イメージの評定を行なった。次に、漱石アンドロイド(朗読条件の場合はスピーカー)が置かれた空間に移動し、漱石アンドロイドの体験談(または漱石ではない男性の人工音声による朗読)を体験する。その後、事後アンケートとして、漱石イメージ評定に回答した後、メッセージの内容についての以下の質問に答える。

質問1：語りはどのような内容でしたか？ できるだけ思い出して書き出してください。質問2：^{ふくら} 囊の中に詰められて出ることができないとは、どのような状態のことだと思いますか。質問3：「私」の不安はなぜ消えたのですか。質問4：この話の中で、「私」は何を伝えたかったのでしょうか。あなたの考えを教えてください。以上の質問に回答したのち、感想を記入して終了した。

2. 結果

本稿では、結果の概略を紹介する。

(1) イメージ評定

図1に、アンドロイド条件での事前と事後のイメージ評定平均値を示す。各平均評定値について、1%水準で有意な変動が確認された尺度は、「心のせまい」から「心のひろい」へ、「親しみにくい」から「親しみがやすい」へ、

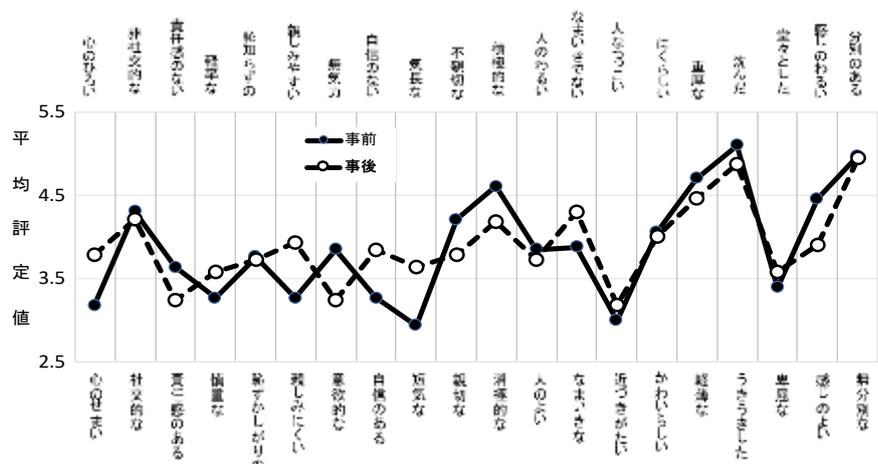


図1 漱石イメージの変動 (アンドロイド条件)

「短気な」から「気長な」、「感じのわるい」から「感じのよい」である。漱石アンドロイドの体験談を通じて、漱石イメージがより肯定的なものに変化したことがわかる。一方、朗読条件では、「短気な」から「気長な」に有意な変動が確認できたが、アンドロイド条件において変動が確認されたそれ以外の尺度については変動が認められなかった。「心のひろい」、「親しみやすい」、「感じのよい」といった尺度は、個人的親しみやすさの次元に属している。アンドロイドによる体験談は、漱石の心情理解を促進し、漱石のイメージを肯定的に変化させたものと考えられる。

(2) 質問への回答

体験談の理解に関する質問への回答について、各回答に含まれる内容を分類して、条件ごとに含まれる回答数を、表1と表2に示した。

質問2については、回答を感情（苦しい、辛いなど）、不自由（身動きがとれないなど）、出口が見えない（八方塞がりなど）の3カテゴリーで分析した。これらは、漱石の主観的体験の表現として理解できる。結果としては、アンドロイド

表1 質問2「囊の中に詰められて出ることができないとは」の回答

	感情	不自由	出口が見えない
アンドロイド	15人(45%)	6人(18%)	21人(64%)
朗読	10人(37%)	6人(22%)	10人(37%)

表2 質問3「『私』の不安はなぜ消えたのですか。」の回答

	納得	やることができた	自己本位
アンドロイド	12人(36%)	5人(15%)	4人(12%)
朗読	7人(26%)	12人(44%)	0人(0%)

条件において、「感情」と「出口が見えない」が多い傾向があるが、統計的には有意ではなかった。全体として、アンドロイド条件のほうが漱石の主観的体験を反映した回答が多い傾向があることが示唆された。

質問3の回答に関しては、アンドロイド条件では「納得」といった主観的体験が多く、朗読条件では「やることができた」といった行動面の回答が多かった。このことも、アンドロイド条件では漱石の主観的体験の理解が促進されたことを示唆している。また、「自己本位」は体験談の中で漱石の転機を表現する中心的な概念であるが、アンドロイド条件でのみ回答された。

さらに、質問4では「『私』が言いたかったこと」について尋ねている。回答を見ると、「自分が若かった頃のように、私たちにも何か漠然とした悩みがあるかもしれないが、そんなに思い詰めることはないということだと思いました。」というように、テキストベースの理解を超えて、状況モデルに基づいた多様な回答が得られた（アンドロイド条件26人78%、朗読条件22人81%）。このことは、今回使用した体験談の内容が実験協力者にとって自己の生活に結びつけて受容しやすい内容であったことを示している。また、アンドロイド条件においては、「苦しい生活の中で過ごしてきた一人の人間としての生き様を伝えたかったのだと思う。これから大学を卒業してそれぞれの道に進む私たちに向けて、応援するメッセージのようなものが感じられた。」というように、その体験談が漱石から自分たちに向けられているように感じられるという趣旨の回答も複数確認できた。

3. 考察

本稿では、漱石アンドロイドのメッセージの媒体としての特性を捉える試みを紹介した。まず、漱石アンドロイドの体験談に触れることによって、漱石イメージがより親しみやすいという好意的なものに変動することは確認できた。実験協力者が漱石アンドロイドから発信されるメッセージを通じて、よりいっそう漱石の心情を受容しやすくなり、漱石のイメージが好意的な方向に変化したものと推測できる。また、メッセージの内容に関する質問の有効性もある程度確認できた。今後、適切な質問の構成などをさらに検討してゆきたい。

今後の課題として、漱石アンドロイドを、漱石のメッセージを伝えるためのよりよい媒体とすることが求められる。アンドロイド条件の実験協力者の感想からは、「アンドロイドの挙動に注意が向いてしまい、内容に注意が向きにくかった」というような回答が見られた。このことは、アンドロイドという存在に馴染むことができてはじめて、アンドロイド本来の特徴が活かしやすくなることを意味している。また、「音声那不自然」という感想も多く見られた。音声の不自然さという限界は、メッセージの媒体としてアンドロイドを考える上では重要である。今後、声優の音声を使用するなどの方法も検討することができるだろう。

夏目漱石の言葉をアンドロイドにのせて時代を超えて現代に届ける試み

大阪大学大学院基礎工学研究科
特任講師 高橋 英之



過去の偉人たちの名言というものは時代を超えて我々の心を励まし、力を与えてくれる。書店に行けば、自己啓発本のコーナーには様々な名言集が並んでいるのは、それらの本には常に一定の需要がある表れであろう。一方で、これらの名言はその言葉単体で存在しているのではなく、その語り手の人格や社会的評判と一体になり固有のメッセージ性を生み出す。例えば、夏目漱石が学生向けの雑誌に寄稿した「文学者たるべき青年」という文章の中に、「もし人が自分に向けて将来文学者たらんとする青年の資格を問うならば、自分は先ず第一に高くしてかつ、ひろい見識を養えと答える。」という文がある。この文を夏目漱石自身が書いたと考え、我々はこの文章の中から文豪からの深い教訓を読み取ろうとするであろう。一方で、名もなき人間が同じ文章を書いていたと我々が信じている場合、夏目漱石が描いたと信じている場合と比較して、単に説教臭い凡庸な文章である、と我々が感じてしまう可能性がある。

我々は技術や文化などの価値を言葉によって次世代に伝達していくが、語り手の存在と一体になって言葉にメッセージ性が宿ると考えると、語り手の存在を無視した言葉による次世代への価値の伝承には限界があると思われる。むしろこれまで価値の伝承であまり注目されてこなかった「語り手」の存在をより強調したメディアというものを生み出すことができたとしたら、これまでとは全く異なる世代を超えた集合記憶の形成というものが可能になるかもしれない。

上記のような野心的な問いを考える上で、夏目漱石アンドロイドの研究は大きな示唆を与えてくれる。具体的には、現代に生きる我々に対して、過去の漱石の言葉を漱石アンドロイドが語った場合と、固有のアイデンティティを有さないロボットが同じ言葉を語った場合で、例え同じ言葉であっても語り手が誰であるかによって我々に与える影響（e.g. 感情の揺さぶられた度合、思考の変容度合）が大きく異なるのではないか、という仮説を立てた。2019年度はこの仮説を検証するための予備実験を二つ行った。

1. 漱石の言葉がどれだけ現代人に響くのかについてのクラウドソーシングによる調査

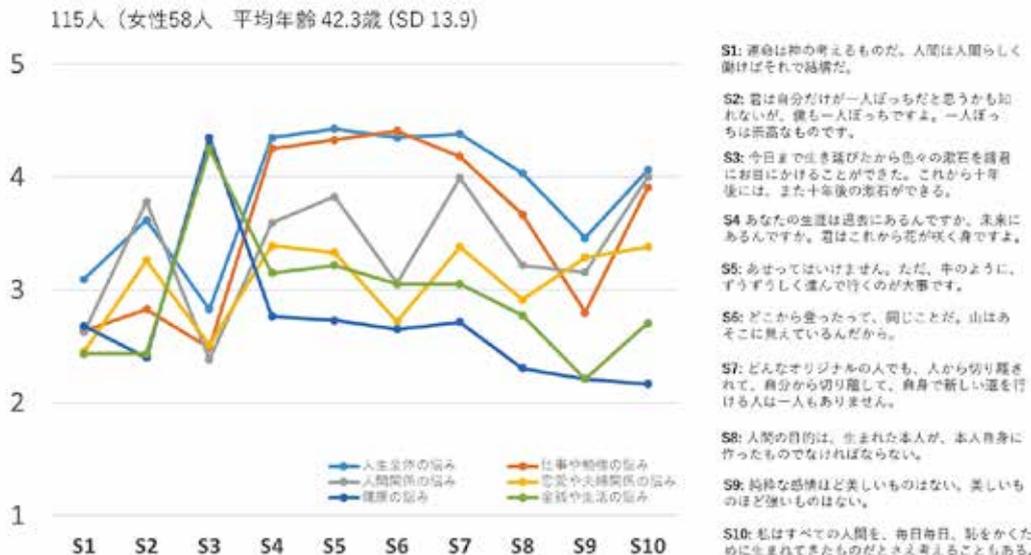


図1. 漱石の言葉が各種の悩み解決にどれだけ寄与しそうか（縦軸）についての印象評定

漱石の言葉がどれだけ現代人に響くのか、いくつかの言葉の候補について二松学舎大学のスタッフに選定をしてもらい、その言葉に一般の方が感じる印象について、クラウドソーシングによって調査を行った。具体的には、10種類の夏目漱石の言葉を選定し、6種類の悩みカテゴリ（e.g. 人生、仕事、人間関係）それぞれごとに、その悩みの解決にどれだけその言葉が寄与するのかを、インターネット上で募った115名（女性58人 平均年齢 42.3歳）の協力者の方を対象にクラウドソーシング（google form）で5件法のリッカート尺度によって回答してもらった。図1にその結果を載せる。この結果から、漱石の過去の言葉は、特に人生や仕事の悩みにおいて、現代人にもかなり高い水準で響くことが分かった。また金銭と健康の悩みに対しては、他の悩みとは異なる言葉が響く傾向があることも結果からみて取れた。このクラウドソーシングの結果に基づき、本実験で使用する漱石の言葉についての選定を行った。

2. 小型ロボット（CommU）を用いた予備実験

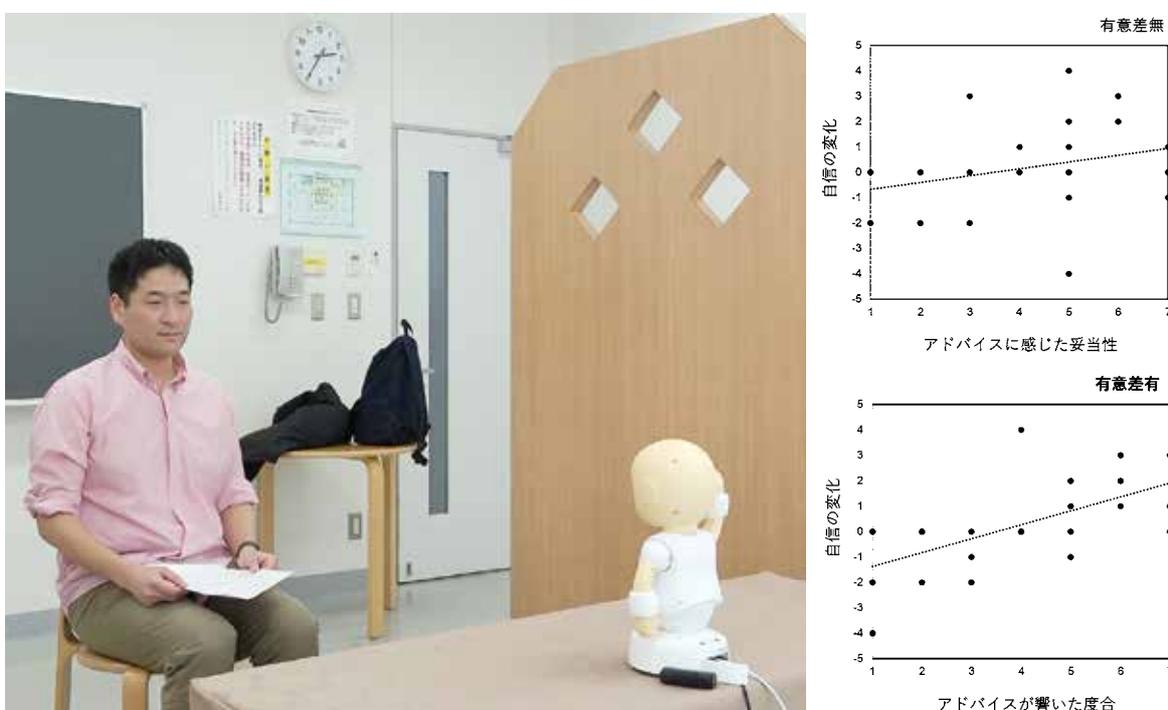


図2. 現在実施中の予備実験の様子

前述の調査は、インターネット上の文字情報として協力者に言葉を提示した。では実際のロボットの発話として漱石の言葉を協力者に届けた際、どのような印象を協力者は抱くのであろうか？ これを調べるために、大阪大学 石黒研究室が開発した小型ロボットCommUが実験協力者の悩みを聞き、それに対して漱石の言葉をアドバイスとして語る、という予備実験を行った。本稿では実験の詳細は割愛するが、この実験の結果として、ロボットが語る漱石の言葉に対して、一定数の被験者が悩みを解決する自信を向上させたことが示唆された。また興味深い点として、どれだけロボットが語るアドバイスが妥当であったという度合いは、悩みを解決する自信に対しては殆ど寄与しておらず、むしろロボットの言葉がどれだけ響いたかという度合いが、実験協力者の自信の向上に寄与していることが分かった。

以上、今年度に行った二つの予備実験について概説をした。来年度は本年度に得られた知見に基づき、漱石アンドロイドを用いた実験を行い、過去の偉人の言葉を現在に伝えるメディアとしてのアンドロイドの可能性について、考察を重ねていきたいと考えている。

国文学科学生がまなざす 漱石アンドロイド—特別講義の実施—

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



2018年度からの引き継ぎ

漱石アンドロイドを用いた教育事業は、2016年度から始まり、2017年度からは文学部の開講科目の一講時を利用した授業を行っている。2019年度は、2018年度に引き続き、国文学科の1年生約300人を対象に、「日本文学概論A」の時間を用いて、特別講義を実施した。漢学塾時代の二松学舎で学んだ夏目漱石の話と作品朗読とを聞くことで、二松学舎および漱石への関心を高めてもらうのが狙いである。

実施日は、2019年4月17日および19日、場所は、二松学舎大学九段キャンパス1号館中洲記念講堂である。内容については、前年度と同様に、夏目漱石の生涯と文学とについて学ぶ必修科目「日本文学講読入門①（夏目漱石）」への接続を意識し、担当者（瀧田浩、宮沢剛、山口直孝）が相談して定めた。音声プログラムの作成、操演、作品解説はアンドロイドサークルの学生に委ねた。

作品は、引き続いて『こころ』下四十一を取り上げた。作者自身の朗読を通じて、小説の理解を深める機会の対象として、高等学校国語の教材として多くの学生の知る作品を取り上げるのが妥当な選択であり、導入教育としてもふさわしい。『こころ』の採用を続けることで年度ごとの反応の比較が容易になるという利点もあり、前年度を踏襲することとした。ただし、挨拶は新たに作り、自己紹介や朗読の部分はより自然な発話に聞こえるように調整した。また、漱石アンドロイドを「二松学舎大学特別教授夏目漱石」として扱うことを徹底し、講義中の世界観に揺らがないように留意した。

当日の進行は、以下の通りである。授業の趣旨説明→メイキング映像の上映→漱石アンドロイドによる挨拶および自己紹介→漱石アンドロイドによる『こころ』朗読および解説→アンドロイドサークル学生による作品解説→担当教員のコメント→アンケート実施→漱石アンドロイドサークルの紹介→記念撮影、アンケート回収。漱石アンドロイドが登場する際の転換も問題なく、渋滞なく授業を進めることができた。年度初めにサークル紹介をした効果は大きく、7名の1年生が入会した。また、漱石アンドロイドを囲んで基礎ゼミナールごとの記念撮影を行ったが、アンドロイドと学生との距離を縮める好機となった。学生の反応はよく、終始雰囲気はなごやかであった。



『こころ』を朗読する漱石アンドロイド

反応の典型

受講生には事前事後にアンケートに協力してもらった。詳細な分析は後日に譲り、ここでは学生像および反応の典型を記述しておく。

必修科目であり、当然であるが、受講生は1年生である（97.3%）。1か月に2冊ほど本を読む（2～3日に1冊以上5.8%、1週間に1冊くらい25.4%、1か月に1冊くらい28.8%）。漱石の作品は、2冊読んでおり（0冊11.2%、1冊26.4%、2冊25.1%、3冊14.2%、4冊以上17.6%）、高校の国語の時間に『こころ』を教わり（教わったことがある89.2%）、通読もした（読んだことがある58.0%、一部だけ読んだことがある39.0%）。『こころ』以外では、『坊っちゃん』、『夢十夜』を挙げる者が多かった。

漱石アンドロイドに会うのは今回が初めてであり（はじめて82.7%）、漱石アンドロイドの朗読によって、作品の印象は

特に変わらず（大きく変化した1.4パーセント、少し変化した11.5%、変化しなかった57.3%）、漱石の印象についても同じである（イメージが変わった19.7%、変わらなかった62.4%）。

漱石アンドロイドについては、人間らしく（どちらかと言えばそう思う32.5%、わりにそう思う30.2%）、本当の漱石が話しているようにも思えた（どちらとも言えない22.4%、どちらかと言えばそう思う31.9%、わりにそう思う19.0%）。『こころ』の朗読は味わい深く（どちらかと言えばそう思う31.2%、わりにそう思う24.1%、かなりそう思う19.0%）、話はわかりやすかった（どちらかと言えばそう思う29.5%、わりにそう思う32.2%、かなりそう思う15.6%）が、人間らしい感情をもっているかどうかはわからず（どちらかと言うとそう思わない14.9%、どちらとも言えない32.9%、どちらかと言うとそう思う18.6%、わりにそう思う13.2%）。

思っていたイメージとは変わらず（問い「みかけが夏目漱石のイメージと違う」、全くそう思わない18.0%、あまりそう思わない35.9%、どちらかと言うとそう思わない15.6%）、動き（問い「身体の動きが夏目漱石のイメージと違う」、全くそう思わない7.1%、あまりそう思わない19.7%、どちらかと言うとそう思わない14.6%、どちらとも言えない38.6%）、視線および表情（問い「視線の動きや表情が夏目漱石のイメージと違う」、あまりそう思わない23.7%、どちらかと言うとそう思わない27.5%、どちらとも言えない38.6%）、話し方（問い「話し方が夏目漱石のイメージと違う」、あまりそう思わない23.7%、どちらかと言うとそう思わない18.0%、どちらとも言えない32.9%）、声（問い「声が夏目漱石のイメージと違う」、あまりそう思わない25.8%、どちらかと言うとそう思わない19.7%、どちらとも言えない32.2%）についても同様である。違和感はあまり感じず（違和感はなかった61.7%）、最初持ったものも徐々に消えていった（最初に感じた違和感がそのまま残っている24.4%、違和感は残っているが、最初よりも少なくなった27.5%、最初に感じた違和感が講演後はなくなった12.9%）。



学生による作品解説

複数の文脈の享受

二松学舎大学文学部国文学科の学生は一般よりも夏目漱石についての知識があり、作品を読むことを通じてある程度具体的なイメージを所持している。学生の抱く像と漱石アンドロイドの印象とは親和的であるがゆえに、アンドロイドは人間として、また漱石その人として受け止められた、と概括することができよう。

自由記述欄については断片的な紹介しかできないが、人間らしさを感じた点としては、人の話にうなずいたり、まばたきをしたりする動作を挙げている回答が多かった。反対に違和感を覚えた箇所では、体の動きのぎこちなさ（特に手の動き）、表情の乏しさに意見が集中した。機械としての能力に限界があり、操演によって不足を補っているものの、人工物である様相が時々露出していることになる。

今後の希望については、他の作品の朗読、作品の解説、『明暗』の続きの執筆、家族や知人についての挿話の披露などがあつた。本格的な講義を期待する声もあり、総じて、アンドロイドが漱石その人であることを前提とする意見が多かった。著名人一般に対するよりも、漱石の固有性に即して発想する二松学舎大学生のまなざしが顕著に現われているように考えられる。漱石に対する関心を刺激し、「日本文学講読入門①（夏目漱石）」の積極的な受講へと接続させる工夫が事後の対応として重要であろう。

特別講義は、催事としての一面を持ち、ここでしか体験できないことという稀少性によって満足感を与える意義も無視できない。最後の自由記述欄には、楽しかったという、素朴な反応が多く見られた。アンドロイドの精巧さに驚かされたという感想も目立ち、受講生の意識が単純ではないことがわかる。一方で夏目漱石の話に真面目に耳を傾け、もう一方でアンドロイドとしての水準を評価する。漱石アンドロイドに注がれる国文学科生のまなざしには、複数の表情がこめられている。受容における二重の態度を分析においてどう抽出していくか、また、教育の中でいかに引き受け、働きかけを行っていくか、課題はおそらく二松学舎大学内にとどまるものではない。

三学会合同国際研究集会における 英文朗読パフォーマンス

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 瀧田 浩



〈国際〉と〈研究〉にシフトした英文朗読パフォーマンス

「文学のサバイバル―ネオリベラリズム以後の文学研究」を統一テーマとした、日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会が2019年11月23日（土）と24日（日）に開催された。23日は明治大学で講演とシンポジウムが、24日は共立女子大学と二松学舎大学で数多くの分科会やラウンドテーブルが開かれた。日本近代文学対象の主要3学会が初めて合同した画期的な集会であったが、この関連企画として、本学では〈国際〉と〈研究〉に重点を置いた漱石アンドロイドによる講演を実施した。

〈国際〉への対応としてはシェークスピアの戯曲「マクベス」の英語原文朗読を含めることとし、〈研究〉への対応としては「漱石が東京帝国大学在職中に唯一発表した学術論文」（服部徹也「漱石「マクベスの幽霊に就て」を読む―幽霊の可視性をめぐるコンヴェンション―」。『日本文学』2017年5月）である「マクベスの幽霊に就て」を講演風に朗読する部分を設定した。

漱石の授業を受けた金子健二の日記を根拠資料として、上記論考で服部は、「マクベスの幽霊に就て」が東京帝国大学の一般科目として開講された作品講読の授業内容を反映していると考えている。漱石の経歴に即して言えば、本講演は、漱石が東京帝国大学で教えていた英文学の授業内容を、若き日に漢学を学んだ二松学舎でアンドロイドを媒体として再現するというユニークな試みであった。

講演は、①冒頭挨拶、②シェークスピア「マクベス」英文朗読（部分）、③「マクベスの幽霊に就て」朗読（部分）、④最後の挨拶、以上四部構成であり、①冒頭挨拶には、漱石と二松学舎とのつながり、漱石と英文学とのかわり、英国滞在中の暮らし、小説『三四郎』における『ハムレット』への言及などを含めた。

なお、漱石アンドロイドの英語発話の音声は、日本語発話の音声と同様に、漱石の孫にあたる夏目房之介氏の音声から採取し、これを加工したものである。



13階の展望ラウンジでサロン風の講演を

漱石アンドロイドの講演は、二松学舎大学九段キャンパス1号館の最上階である13階ラウンジでおこなった。三面がガラス張りのサロン風の場所で、来聴者がリラックスして知的に愉しめる雰囲気を感じた。講演前と講演後に進行役の瀧田浩が本講演の趣旨を説明し、アンケートへの協力をお願いした。また、終了後は質問があれば、西畑一哉と瀧田が答え、漱石アンドロイドの撮影、漱石アンドロイドとの撮影希望があれば、積極的に認めた。なお、当日の会場設営・アンドロイド稼働等は本学の漱石アンドロイド研究会所属の大学生や大学院生が務めた。プログラムの作成や当日の微調整は二木潤と桑原侑己が、漱石アンドロイドの講演途中に本やお茶を持参する役を金子亮太と宮原拓希が、その他の必要な準備作業を同研究会所属の岡部優香が、全体の統轄を伊豆原潤星が、それぞれ務めた。早い回の来聴者から「アンドロイドと人とのインタラクションがあるとよいのではないか」との助言があり、朗読するための本を講演の途中で運んでくるといふ演出を次の回から導入するという対応などもおこなった。

講演は全4回おこなった（内容は同じ）。実施時間と来聴者数は以下のとおり。第1回（12時10分～12時25分）来聴者12人。第2回（13時10分～13時25分）来聴者7人。第3回（14時10分～14時25分）来聴者1人。第4回（15時10分～15時25分）来聴者36人。来聴者数に大きな差があるのは、当日は2会場で分科会を開催しており、会場移動のタイミングと本講演時間の関係によると考えられる。全4回を合わせると、56人が本講演を来聴した。



アンケート集計結果—研究者たちが観た漱石アンドロイド—

来聴者56人のうち32人がアンケートに回答した。選択式のアンケートのうち、職業と来聴理由に関するものを以下に示す（省略したのは、年齢層・居住地・本講演を知った媒体についての回答）。

【職業】 学生＝11人（34％） 教員＝20人（63％） 自営業・フリーランス＝1人（3％）

自営業・フリーランスの1名を除いた全員が学生か教員であった。その場の印象として「学生」のほとんどが大学院生、「教員」のほとんどが大学教員であった。研究集会の特性上彼らの専攻領域は日本近代文学であると考えられる。この点はこれまでの漱石アンドロイド関連イベントの歴史の中で特筆すべきであろう。日本近代文学を代表する夏目漱石のアンドロイドを製作し、私たちは多くの場でパフォーマンスを提供してきたが、本講演は最も研究的な環境の中でおこなわれたものだった。

【来聴理由】 ※複数回答可 日本近代文学会の会員だから＝17人（55％） 昭和文学会の会員だから＝10人（31％）

社会文学会の会員だから＝4人（13％） 近代文学に関心があるから＝11人（34％） 漱石アンドロイドに関心があるから＝11人（34％） 漱石の研究をしているから＝5人（16％）

「近代文学に関心があるから」の11人と「漱石の研究をしているから」の5人に注目すべきであろう。漱石アンドロイドのパフォーマンスを、専攻する研究的関心に基づいて来聴しようとする者が10人を越えていた。

選択式のアンケート項目の後には、記述式の3つの設問、①「英語講演をお聞きになって、どのような感想を持ちましたか?」、②「今後、漱石アンドロイドにどのようなことを期待しますか?」、③「そのほか、感想をご自由にお書きください。」を用意した。専門的な研究者による回答は貴重なのだが、紙幅が許さないので具体的な紹介はおこなわない。いずれの設問に対しても概ね肯定的な感想が多かった。

まとめと今後に向けての課題

「マクベスの幽霊に就て」の朗読部分における漱石の主張は〈科学が幽霊を幻想であると排除しても、文芸が幽霊を排除してはその魅力と意味を失ってしまう〉というものである。今回科学の力によって、この主張をいわば幽霊的な存在である漱石アンドロイドに口述させたことには逆説的な意味がある。しかし、このような考える困難が伴うところにこそ、文学的に考えることの起点があるのではないか。

講演終了後に進行役の私が説明したのは、(回によってかなり違いがあったが) 概ね上記のような内容だった。私の説明に傾く来聴者もいたが、アンケートの回答や当日のエンターテインメントに触れた際に示すようなリアクションを参照するかが、来聴者が研究者であっても、アンドロイドの〈身体〉を使ったパフォーマンスはメディア自体のインパクトが大きく、発する言葉の意味・文脈について知的に思考することよりも、発する言葉の自然さ・〈身体〉との同調性などに来聴者の意識が傾きやすいということがわかる。

来聴された海外出身のある研究者は、「世界的にみても稀な、この文豪のアンドロイドをヨーロッパで開催される日本学の大規模なシンポジウム等に連れていき、そこでこのインパクトを経験させるべきだ」と私に助言してくれたが、エンターテインメント的に消費されて終わりにならないためにも、学術的な経験を提供する上で何が求められるかについての検証が今後も継続的になされなければならない。

北陸の大学生は漱石アンドロイドを どう受け止めたか

—富山大学での出張授業—

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



初の学外授業の実現

漱石アンドロイドは、依頼に応じてさまざまな場所でデモンストレーションを行ってきたが、講義は、学内に限られていた。附属高校の生徒や文学部の学生を対象とした授業を複数回実施し、教育効果についてある程度知見を蓄積してきたが、比較対象がなく、多角的な検証段階には至っていなかった。富山大学での出張授業は、よき参照項が得られたという意味を持っている。

実施に際して、富山大学人間発達科学部の西田谷洋教授に協力をお願いした。始まりは、北陸銀行、大垣共立銀行共催の「ビジネス・サミット2019—北陸・東海ものづくり 技術のビジネスマッチング」（2019年11月1日）のイベントに招かれたことであった。出張の機会を活かして、富山大学での授業ができないかどうかを打診したところ、快諾を得た。西田谷教授は、日本近代文学を専門とし、認知物語論などの文学理論に精通している。富山大学が所蔵する小泉八雲資料の調査も手がけており、協力者としてこの上なく理想的である。西田谷教授には迅速に対応していただき、担当科目「日本文学概論」の一講時を特別編に充て、10月31日3時限、五福キャンパス人間発達科学部第三校舎332教室にて行う手筈を整えていただいた。受講者は約60名、教室は中型で、漱石アンドロイドに触れてもらうには、恰好の規模である。実施に先立って、9月には下見を行い、設営の手順を考えた。内容について相談し、受講者から事前に漱石アンドロイドへの質問を出してもらうこと、「漱石アンドロイドと学ぶ日本文学」と銘打ち、富山大学からプレスリリースをしてもらうことなどを取り決めた。



「漱石アンドロイドと学ぶ日本文学」教室

小泉八雲とのつながり

朗読プログラムには『こころ』を選び、富山訪問が初めてであることや小泉八雲資料について知ったことなど挨拶の言葉に盛り込んだ。また、受講生からの質問の中から三つを選び、回答を作成した。一例を挙げる。

（質問）最近ゲームキャラにもされますがどう思いますか？

（回答）妙な気分です（間）。体型も顔も違って、自分だとはとても思えません。「文豪」と呼ばれているのも、本人としては勘弁してもらいたいです。とはいえ、私も世間を茶化して『吾輩は猫である』を書いていますから、文句は言えませんね。まだ遊んだことがないので、いずれゲームを試してみたいと思います。

進行は、アンドロイドサークルの学生が担当することになり、研究助手の伊豆原潤星、アンドロイドサークルの大川香苗、二木潤を帯同した。伊豆原が全体の統括を、大川は司会を、二木はアンドロイドの操演をそれぞれ担当した。配付物としては、漱石アンドロイドの紹介リーフレット、アンケート、の二種を用意した。アンケートは、二松学舎大学の特別講義と同じである。

授業は、本日が特別授業であるという、西田谷教授の告知から始まった。漱石アンドロイドは、すでに教室前方に設置されており、受講生の視野に入っている。漱石アンドロイドは、富山大学を初めて訪れるが、小泉八雲を介して縁のよ

うなものを感じていると挨拶し、続いて『こころ』の下四十一を朗読した。披露後西田谷教授が、「差異化としての『心』」と題して解説を行い、漱石の『こころ』が八雲の『心』の影響を受けながら、伝統的な共同体に帰属できない孤独な個人の心情を描き、異なった特徴を持つことを指摘した。西田谷教授の考察に謝辞を述べた後、漱石アンドロイドは、学生からの質問に答えた。最後は撮影時間とし、受講者の一人には、漱石アンドロイドとの握手も体験してもらった。司会者の当意即妙な対応も助けとなり、和やかな雰囲気ですべての授業は進んだ。授業終了後には、西田谷教授の指導する学生と漱石アンドロイドサークルとが集う席を設け、意見を交換した。



漱石アンドロイドと握手する受講生

アンドロイドであることへの関心

漱石アンドロイドを初めて見る受講生たちは、最初とまどいも見せたが、すぐに馴れ、『こころ』の朗読には集中して耳を傾けていた。西田谷教授や受講生とのやり取りでは笑いが起こり、撮影会も盛り上がった。講義を楽しんだ学生が多数であったと思われる。アンケートに寄せられた声をいくつか紹介する。

- ・とても貴重な経験をさせていただきました。声、顔などほぼイメージどおりで感動しました。アンドロイドなので、「人間らしい」というのは本当に難しいことだと思いますが、ここまでのクオリティは素晴らしいと思います。
- ・アンドロイド、という観点から見ると音声に違和感がなく、聞き取りやすかったです。遠目から見ると細かな動作以外は人間と変わりなく、技術の進み具合を感じました。一人の人間をアンドロイドとして再現するということはロマンがあると思いました。いつかリアルタイムで対話できるようになるのが楽しみです。
- ・このような機会は滅多にないので、漱石の姿・声を模したアンドロイドを見れてありがとうございます。／気が難しそうでありながら、弟子や生徒から好かれていると考え、気さくな人なんだろうと思うので、手を振ったり、ほほ笑んだりするのは漱石らしいかもしれないと思いました。
- ・声を1音1音組み合わせているなんて気づかなかったほど、流ちょうだった。肌や視線の動きなど、生の漱石がいるように感じた。話している人を見るのはとても人間らしい部分なので、これだけでもすごいと思ったが、もっと改善されるのが楽しみだ。
- ・想像していたよりもリアルで、実際に漱石先生に会ったような気分になりました。とても感動しました。／手を振ったとき、マスクをしていたのに微笑んで手を振り返してくれたのはとても嬉しかったです。／また制作に様々な文献を用いていることが分かり、制作の中で日本文学に触れる機会も増え、機械と文学が関わっているのが興味深かったです。本日はありがとうございました。他の文豪でもぜひ作っていただきたいです。

詳しい分析は、アンケートの統計処理を終えた後となるが、二松学舎大学の協力で実現したという説明を受けた謝辞が多く見られたこと、アンドロイドがどれぐらい人間的であったかという観点からの評価が目立ったこと、漱石らしさをしぐさや話し方から感じ取ることが少なくなかった、などの傾向がうかがえた。人間発達科学部という複合的な性格の学部生が集っていることに、理由が求められるかもしれない。二松学舎大学文学部国文学科の学生とは、作品と結びつける関心のあり方に異なりが現われているように思われる。

特別授業については、北陸中日新聞社、富山新聞社、北日本新聞社など、数社の新聞社の取材があった。富山で、また他大学で初めて漱石アンドロイドが講義する、ということがニュースとなる価値を持っていることを再認識させられた。翌日以降、随時記事が配信されていく中で、『毎日新聞』富山版（2019年11月4日）の「田中耕一さんや漱石アンドロイド／富山大に特別講師登壇」が興味深かった。近い時期に別のキャンパスで行われたノーベル化学賞受賞の田中耕一氏と漱石アンドロイドとを一括りにする紹介は、アンドロイドの社会的認知を表わす資料となるものであろう。

富山大学での出張講義は、前述の通り、二松学舎大学以外での教育実践の機会を持つことができた点で画期的であった。同時に首都圏以外での活動について、地元組織やマスコミと連携することで波及効果をもたらす催事となることが確認できた点でも収穫があった。別の場所での開催がさらに検討されてよい。

動詞「よみがえらせる」の特異性と、 漱石アンドロイドの「物語」

—共同研究プロジェクトの新展開—

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 島田 泰子



1. 本年度の振り返りと総括：イベント成功に見る研究の転換点

プロジェクトも4年目を終えた。漱石アンドロイドは忙しく各所へ出向いて行つては「広報資源としてのご公務」に励み、稿者はこの一年、内外の関係各位から協力を得ながらシンポジウムの実施を柱として「共同研究」の推進に関わった。準備段階からイベント終了後の成果発信（モノログ作品全編映像のweb公開とトーク内容の書籍化準備）に至る一連の経緯を総括するに当たって、今年度が本プロジェクトにとって転機となる重要な年であったことが、改めて痛感される。

特筆すべき1つめは、数々の気まずい“不都合な”真実とそれが示唆する重要なヒントに向き合う中で見出される「新たな展開」を、実際の議論の方向性において具現できたこと。2つめは、従来のTTS（text to speech）ソフト利用者が陥っていた作業手順等の「技術的誤謬」を原理的に解明し、合成音声のクオリティ向上つまり不自然さ解消の余地を、モノログ作品のセリフ生成において実践的に示し得たこと。この2つに加えて、学生アンドロイドサークルが発足以来積み上げてきた「ノウハウの洗練と技能の向上」が開花し、これらのすべてが、シンポジウム当日、オープニングアクトのモノログ上演と本編トークショーにおける討論内容の両方に結実した。本報告書 p.14にまとめられたようなイベントの大成功と反響は、漱石アンドロイドをめぐるこの間のさまざまな試行錯誤を含めた「共同研究」の進展とその共有がもたらした成果と言える。

2. 日本語学的観点からの気付き：「よみがえらせた」と「どや顔」のまずさ

転換の背景や契機についても書き留めておきたい。稿者は昨年度末、本研究プロジェクトからのスピンオフとして、一編の論考を草した（『日本語の使役受身表現における変革の一端：〈よみがえらせる〉型から〈よみがえらされる〉型への移行をめぐる』『言語文化研究』18）。論考じたいの趣旨や要点はまったく別のところにあったが、本プロジェクトの根源的な部分に少なからず関係する言語使用上の事実が、用例データの調査を通じて判明した。現代日本語における「よみがえらせる」という他動詞的な使役表現が、一般的な用法では「土地」「土」「森林」などを対象とする場合に偏る…という特異性である。動物や人間存在などについて「よみがえらせる」を使う例は、極めて得られにくいのである——聖書に関する「イエス・キリストの復活」の話題を例外として。

これは、ひとたび失われた命を復活させることなど不可能、故人を「よみがえらせる」ことは神のみ可能な技である…という認識と表裏をなすものであろう。こんなもので漱石を「よみがえらせた」とか“どや顔”で言うなという内外の辛辣な声は、ひねくれた例外的なものではなく、「よみがえらせる」の用法における慣習的な暗黙の含意にも裏付けられた、至極まっとうな情緒的反応であったわけだ。「再現を試みた」に過ぎないものを「よみがえらせた」と表現することに眉を顰めるのは、平たく言えば「神にでもなったつもりか」ということであろう。

ちなみに、漱石が我々によって「よみがえらせ」られた、という場合のさらなる受身表現に関する用法の分析過程で、通常の使役受身表現にしばしば観察される「不本意」「強制」などの含意について検討しようにも、当たり前のことながら当人の意思確認が困難である…という事実が、改めて顕在化した。いずれにせよ、明治の文豪を（不本意かつ不完全なかたちで）「よみがえらせた」ことになってしまったものを、どうフォローしたものか。プロジェクト外の論客をも巻き込んだ本年度の共同研究テーマの方向性は、そういった経緯から立ち上がった。

3. 漱石アンドロイド研究の新展開：不都合な真実と向き合うことで見出された光明

「よみがえった」のではなく「似せ（て作った）もの」を、なんとかホンモノに、より似せようと腐心する限り、漱石アンドロイドがミニマムな仕様を実装したサグリヨ・タイプ（安価な下位機種）であることに起因する困難や制約が、常に

目の前に立ちはだかり続ける。前節に触れた漱石アンドロイドへの冷やかな反応に、これが拍車を掛けている部分もある。シンポジウムではこれを（より伝わりやすい表現で）「エントリーモデル」と呼んであえて俎上に上げ、その後の書籍化に向けた活発な議論においても、1つの焦点に据えた。

漱石アンドロイドの作りものとしての側面をより積極的に凝視しようとするならば、AI未搭載の「ハイテク電動操り人形」という見方もあり得よう。そもそもこのプロジェクトじたい、上から投げ与えられた「文豪そっくり人形」の遊び方を不器用に模索する、壮大な「おとなの人形遊び」である。人形と人との関わりに学び、より広くモノと人との関係性に照らした議論を持つ必要があった。また、何のストーリー設定もなく立ち現れたエントリーモデルの文豪人形を前にした「見る側」の困惑は、思えば「見せる側」の我々が本来用意すべきであった「物語」性の欠如というへまも関連していそうだ（次節で詳述）。

漱石アンドロイドを無邪気に歓迎し誇りに思ってくれる人ばかりだと良いのだが、必ずしもそうではない。彼らの負の反応（失望、シラケ、鬱鬱、嫌悪、反発）、あるいは制約や限界、へま、失敗（に見える実は貴重な試行錯誤）…これまで言及することが憚られたり伏せられたりしてきた側面を、研究の立場では、作りものに過ぎないという事実とともに、黙殺隠蔽せずむしろ積極的に観察と分析の対象にしていこう。その方向性は本年度に入って慎重に検討が進められ、シンポジウムを機に活発化した。研究の活性化がその内容で注目され話題を呼べば、結果として広報的な貢献にも寄与することに十分なる。そのことがプロジェクト関係者の間にも静かに共有されていくことで、新たな展開に向けた転換の先に光明も見出されはじめた。

4. 反省と課題：漱石アンドロイドをめぐる「物語」性

あなたは、なぜ、その姿で、いま、ここに、この私の目の前に、居るのか。向き合う者のそんな問いに答える、漱石アンドロイドをめぐる「物語」は、どう欠如していて、なぜ必要か。

2017年11月、松山巡業の折、稿者は少なからず胸打たれる場面に立ち会った。現地の高校生がイベントの最後に声を震わせ感激もあらわに「作りもののアンドロイドと頭で分かっている、こうして漱石先生にお会いできて、光栄です！」と漱石アンドロイドに握手を求めたのだ。「地方の+高校生」ならではの「純真な感受性」ゆえ、と片付けるのも、ちょっと違うだろう。在学する高校の（旧制中学時代の）「旧職員」として講演に招聘された、との言いなしと、現職員たちの尽力により数ヶ月掛けて丁寧に整えられてきた演出のもとに引き合わされた漱石アンドロイドに対して、彼は、漱石と自分たちとに固有の関係性や意味を見出していたのだろう。この著名な文豪に、時代がズレていけば、自分もここで習ったかもしれない。そのリアリティをバーチャルに体験させるのがアンドロイド漱石「先生」であった、ということだろう。

では、二松学舎ではどうか。時代がズレていけば、自分たちも同じ「ここ」で若き日の夏目金之助とともに学んだかもしれない…と当事者性を喜んでもらえるような仕掛けが、当事者性を自覚できる細部にわたる行き届いた「仕込み」が、すっぽりと欠落したままなのではないか。「よみがえった」のならよみがえったで、百年の眠りから覚めていまここに彼が存在することにまつわる「物語」が、洒落っ気・茶目っ気・遊び心たっぷりに用意されてもよかったかもしれない。うやうやしい接遇の態度も「実在するていで振る舞う」シャーロキアン流儀と作法のパロディとして、含み笑いとともて共有出来たかもしれない。それを欠いたまま、“真顔”で「漱石先生がよみがえりました」、しかも微妙な仕様のエントリーモデルで「ほら、凄いでしょ」とやり過ぎれば、「空気を読んで調子を合わせることを強要された不快感と抵抗感を抱き、「共犯関係」の拒絶として「茶番」という表現を持ち出す。「虚構リテラシー」「テクノロジー付度」といった用語と概念、そして虚実を織り交ぜて成立させる「物語」の必要性について、シンポジウムを機に学べたのは、やはり今年度の大きな収穫であった。

5. 展望：「第3フェーズ」に入った研究プロジェクト

以上振り返ったとおり、本プロジェクトは、ロボット本体の製作やそのための準備としての調査活動などを行う第1フェーズ、完成を受けて実際の運用を開始し、慣れないアンドロイドに困惑しつつも試行錯誤を重ねつつ反省点をフィードバックしながら経験とノウハウを蓄積してきた第2フェーズに続き、今年度からいよいよ第3フェーズに入ったと言えよう。静かに飛躍と発展の局面を迎えたわけだが、イベント報告のページで指摘されたとおり漱石アンドロイドの運用には、声の作りも操演も、プロジェクトの行く末に至るまで、人形遣いである「中の人」次第という問題が大きい（p.17）。それはある種の「作家」性とも呼べるものであり、「物語」と並んで、まさに文学研究の独壇場であるはずだ。人文学も、筆を選ばずの心で腕まくりをして良いかもしれない。

アンドロイドとAI美空ひばり、そして ゲームキャラクターとしての三浦大知

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 塩沢 一平



1. アンドロイドとAI美空ひばり3D

2019年度の漱石アンドロイドシンポジウムは、「アンドロイドに魂は宿るか？ 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」というテーマで開催された。その冒頭、コーディネーターの島田泰子二松学舎大学文学部教授が、「デジタル仏壇」「QRコード過去帳」などといった、最新技術によって「故人と向き合う装置」を紹介し、それに並ぶ存在として、故人のアンドロイド化を位置付けるといった視点を示した。この捉え方は、その後にシンポジウムの中で展開された登壇者たちのプレゼンテーションが「死」や「喪」の問題を取り上げていたこととも、深く関わっていた。

昨年故人を再現したものとして、AI美空ひばりが話題になった。NHKとヤマハなどが協力して没後30周年を記念して、その歌声、姿形を再現し、新曲「あれから」を披露するというプロジェクトである。これは「NHKスペシャル AIでよみがえる美空ひばり」として2019年9月29日に放映された。AI美空ひばりは、漱石アンドロイドのように、生身の形を持った三次元のものではない。ただし二次元ではあるが、等身大の3D（＝二次元に映し出された三次元感ある映像）であり、三次元に近い物といえよう。生前美空ひばりの衣装を担当していた森英恵は、番組でも衣装を担当し、（美空ひばりを）「よみがえらせる」と、その決意を述べており、出来上がったAI美空ひばり3Dは、アンドロイド亜種といえるのかもしれない。

テレビ画面を通してのAI美空ひばりは、記憶に残る美空ひばりとは歌声や表情に、微妙な違いを感じさせるものであった。しかし生前からのひばり後援会の人々や息子加藤和也氏が涙する姿、歌の間奏での「お久しぶりです。あなたのことをずっと見ていましたよ……」などという死後30年を埋めるような語りもあり、こちらも思わず涙ぐむような出来映えであった。しかし、その出来映えは、AI美空ひばり3Dそのものというより、テレビ画面の、しかも感動を誘う仕掛けの語りや、番組というストーリーを含めての中でのものであった。

幸い実際のAI美空ひばり3Dに会う（?!）機会を得た。昨年森美術館で行われた「未来と芸術展」の特別企画「AI×美空ひばり『あれから』」として、この3Dを見ることができたのである。定員20人ほどの横長のシアターに、等身大の美空ひばりが3Dとして映し出されていた。

直に接した3Dは、テレビ番組以上に違和感を持つものであった。本物と紛うばかりの白い衣装の波打ちや手の動きに比して、顔の表情のぎこちなさと、深みのない声が気になって仕方がなかった。特に顔の表情は50箇所が連動したものとされる（先述「NHKスペシャル」）にも関わらず、動かない部分との違いが際立つ不自然な表情であった。いわゆる「不気味の谷」に落ちていたようである。「不気味の谷」とは、ロボットが人間に近づくにつれ、ある時点で、その差異が気になり不気味さを感じるというもので、森政弘東京工業大学名誉教授が1970年代に提唱した理論である。石黒浩大阪大学教授が「アンドロイドは、見た目、動き、声……これらのなにかひとつが『違う』と思われるとすぐに不気味の谷に落ちてしまう。とくに、特定の人間にそっくりなアンドロイドが出てくると、ひとはいちいち細かく注意してながめてしまうのだ」（『アンドロイドは人間になれるのか』文春新書 2015年）と述べるのと同様の現象が、AI美空ひばり3Dにも起きていたと考えられる。

アンドロイドは、当初不気味に思われていたものが、繰り返し接しているうちに親近感を持つようになることも知られている。AI美空ひばり3Dも同様であった。リピート再生されるAI美空ひばり3Dが歌唱する「あれから」を4回立て続けに聞いてみた。既に2回目から、違和感は薄らいでおり、微妙に本物の美空ひばりとは違うものの、高い水準に到達している美空ひばりアンドロイド亜種として、応援したい気持ちも湧いてきた。応援ということばでもわかるように、私は、AI美空ひばり3Dを、本人そのものと理解したのではない。「NHKドキュメント」での加藤氏や後援会の人々そして私の涙も、実は本人に近いAI美空ひばり3Dを媒介（荒っぽく言うならば「いたこ」のような存在）として、その背後に美空ひばり本人を感じ取ったからではないだろうか。

AI美空ひばり3Dは、2019年の紅白歌合戦にも登場した。プロジェクトのストーリーから切り離された存在は、初対面の視聴者からは賛否両論が巻き起こり、NHKには「気持ち悪い」「死者への冒瀆」という類の意見も寄せられた。NHKは、この原稿の後になるが2020年3月20日にプロジェクトの検証番組「AI美空ひばり あなたはどう思いますか」を放送予定であるという。この番組は、翻って本アンドロイドプロジェクト検証への示唆となると考えられ、アンドロイドとAI人物3Dとの関係は、引き続き研究が必要と考えられる。

2. 自らのアンドロイドとしてのジェミノイドHI・『DEATH STRANDING』（デストランディング）のキャラクターとしての三浦大知

漱石アンドロイドもAI美空ひばり3Dも、故人の再現という点で共通しており、後者はアンドロイド亜種と考えられるものである。これとは別にアンドロイドには、生きた人間のアンドロイドもある。マツコ・デラックスや黒柳徹子のアンドロイド「マツコロイド」「totto」である。生きている人のアンドロイドは、本人の許可をとって作られるが、許可ではなく、本人が積極的に自らのアンドロイドを造り出そうとする場合もある。自らのアンドロイドとのツーショット写真でも有名な、本プロジェクトの共同研究者石黒浩氏である。石黒氏は、人とは何か・人の心とは何かを考えるためにロボットを作り、自身のアンドロイドを作るとどのような気分になるかに興味があり、自らのアンドロイドとしてのジェミノイドHIを作成した旨を述べている（前掲『アンドロイドは人間になれるのか』、石黒浩『人とは何か アンドロイド研究から解き明かす』NHK出版 2019年）。

アンドロイドではないものの、ゲームの中に自らを積極的にキャラクターとして登場させる場合がある。世界的ゲームクリエイターとして知られる小島秀夫氏によるPS4ゲーム『DEATH STRANDING』（2019年11月発売 以下デスト）にカメオ（ゲームの物語とは関係ないサブキャラクター）の「ミュージシャン」として友情出演している三浦大知氏である。三浦大知氏は、2017年より3回連続して紅白歌合戦にも出場している、美空ひばり同様、まさに実力派ミュージシャンである。ゲーム好きであることを公言しており、小島氏との対談でも小学校五年生のころから小島作品に憧れていたことを述べている（ニュースサイトBuzzFeed 2019年3月25日）。彼が発信するSNSにも小島氏やそのキャラクターが度々登場している。その三浦氏はデストに積極的に関与し、「ミュージシャン」はわざわざ三浦氏の3Dスキャンを基に制作されている。立ち去って行く動作は、ライブの中で歌い終わった後にステージから去って行く本人を想起させるものともなっている。このゲーム内キャラクター「ミュージシャン」も、アンドロイド亜種と考えることも不可能ではあるまい。

さて、その三浦氏は、かけ声や手を振っている特定のファンには答えない、どのファンにも平等に接しているアーティストとして、ファンの間では知られる。対してファンは当然三浦氏との繋がりを求める。その方法として、ライブ時に、三浦氏のイラストを模し特別にアレンジされたスタンド花や楽屋花を贈る、「お花企画」と呼ばれるものを立ち上げることがある。三浦氏と直接的に繋がれない代わりに、花を贈り見てもらうことにより、間接的に繋がっている実感を持ちたいという意味からのものでもある。数十人が費用を分担し花を贈る。この場合も賛同者は一律1000円ほどの金額を出し合う。同額となっているのは、先の三浦大知氏の平等主義に呼応するものと考えられる（塩沢一平「三浦大知のファン文化研究」『人文論叢』103号 2019年10月）。

デストで三浦大知氏のファンがプレイする場合、ゲーム内での段階を上げ、なんとか「ミュージシャン」に会おうとすることになる。これは特定の個人の力によって、「ミュージシャン」という疑似三浦大知に会うという繋がりをもてるからである。デストでは、プレゼントとしてハーモニカを受け取ることもでき、個人的に受け取れる一種のファンサービスともいえる。「ミュージシャン」は家を去るときに見送りをしてくれたり、プレイヤーが好きな場所に配置することができるようになる。現実の三浦大知氏本人では叶わない個人的な繋がりやファンサービスを、デストというゲームの中では受けることができるのである。ただ、「ミュージシャン」は三浦大知とも名づけられておらず、またその出来映えもアニメと三次元の間のようなホログラム風に敢えて作られており、本人と見紛う存在ではない。美空ひばり3D同様に、ファンは「ミュージシャン」を媒介として、その向こう側にいる三浦大知氏本人との繋がりを夢想していることと考えられる。

デストの「ミュージシャン」は、三浦大知氏のファンとファン文化研究に重要なキャラクターである。また、「1」のAI美空ひばりも含めて、著名人アーティストアンドロイドとそのファンとの関係研究の糸口になる可能性もある。さらにアンドロイドを考える上でも、人間がアンドロイドによってどのような影響を受けるかということだけでなく、アンドロイドにどのように積極的に関与していくかを考える示唆ともなるだろう。アンドロイドやアンドロイド亜種の研究は、様々な可能性が考えられる。

研究と教育のあわい —漱石アンドロイド サークルの記録—



二松学舎大学大学院文学研究科

助手 伊豆原 潤星



二松学舎大学大学院文学研究科

助手 金子 亮太

1. はじめに

本稿では、2019年度の漱石アンドロイドサークルの活動について報告する。アンドロイドサークルは2017年度に発足した組織で、教育にアンドロイドを活用するという目的のもと、学生が主体となって漱石アンドロイドを運用し、夏目漱石の作家像やアンドロイドと人間の違いなどの様々なことを実践的に考えていくことを目的としている。正式名称は「漱石アンドロイド研究会」という。漱石アンドロイドを単に操作するのではなく、学生自らが「研究」することを活動の中心に据えている。

2019年度のアンドロイドサークル構成人数は28名（内訳：1年生7名・2年生6名・3年生6名・4年生9名）である。活動日は、毎週水曜日4・5限と、毎週木曜日6限の時間である。自身の時間割やスケジュールと照らし都合の良い時間帯に週1度参加するという形式をとっている。活動内容は、漱石アンドロイドの話す台本の作成、音声の作成、漱石の伝記的調査、演出の考案、新企画の立案などである。それぞれの技能や関心を活かして日々の活動を行っている。

2019年度は、前年度に整備した活動環境を基盤に「世界初のことをする」をテーマに掲げて多くのイベントに参加した。4月は本学国文学科1年生向け特別講義、5月は羽二重団子本店リニューアルオープンイベント、7月は本学同窓会組織・松苓会での講演会、8月・9月はオープンキャンパス、10月は富山大学での講演、11月はシンポジウムおよび三学会合同国際研究集会、12月は改田教授主導の心理実験、2月は国文学科推薦入学者向け説明会および阪大主導の心理実験に参加した。以下、それぞれのイベントについて詳述する。なお、1年生向け特別講義・心理実験の当日の状況についてはそれぞれ24～25頁・20～23頁の詳細な報告を参照されたい。



活動風景

2. 羽二重団子本店リニューアルオープンイベント

羽二重団子は、本店が日暮里にある1819年創業の団子屋である。正岡子規が通った店としても知られ、店の横には「芋坂も団子も月のゆかりかな」の句碑が建っている。同店には、子規だけでなく漱石も通っていたと思われ、『吾輩は猫である』にも羽二重団子と思しき店が登場する。今回、漱石アンドロイドはそういった縁に加え、リニューアルオープンに際して文学とのつながりを感じさせる内装にしたいという先方の希望もあり、本店のリニューアルオープンイベント（2019年5月18日）への登場を依頼された。漱石アンドロイドサークルはイベントにあたり、音声作成などの事前準備に加え、スタッフとして3名が当日参加した。スタッフとしては、客の誘導や漱石アンドロイドの操作補助を行った。当日、漱石アンドロイドは計7回、挨拶や朗読などを披露した。台本は、広報課の越後屋かおり氏が作成した台本をベースに、漱石アンドロイドサークル2年生の岡みなみが伝記的調査を踏まえて子規や漱石の俳句の引用を加えたものである。俳句を五七調で漱石アンドロイド



羽二重団子での様子

に音読させるのはシステムの少々難しいが、文章にリズムが生まれ観客を飽きさせない。本イベントでの経験をきっかけに、台本に俳句を取り込む工夫は様々なイベントにおいて継続して行った。

羽二重団子のような夏目漱石にゆかりのある場所を漱石アンドロイドが訪れるイベントは来年度も継続して行っていききたい。ゆかりの地としては、漱石の書齋が再現されている新宿の「漱石山房記念館」や、漱石が療養した静岡の「修善寺温泉」、遠いところでは4年間の教員生活を送った熊本などが考えられる。漱石ゆかりの地に漱石アンドロイドが訪れることで、場所の意味性が強化されることになるだろう。イベントを踏まえて、漱石とのゆかりについて学生が調査してまとめた章と、場所に関連する論考を教員が書いた章を組み合わせた論集の出版も出来ればと考えている。二松学舎大学は、『二松学舎大学が案内する 東京都市文学散歩』『奈良・京都 文学散歩』『神奈川 文学散歩』『東京 文学散歩』と計4冊の文学散歩本を出版しているが、それを引き継いだ新たな形の漱石アンドロイドを主体とした文学散歩本を出版することは、二松学舎大学らしさを生かす取り組みであろう。

3. 松苓会でのイベント

大学同窓会組織の松苓会から依頼があり、2019年7月27日に行われた支部合同講演会にて漱石アンドロイドは『夢十夜』「第三夜」を披露した。当日は、アンドロイドサークル所属の4年生・大川香苗による漱石アンドロイドおよびアンドロイドサークルの説明、漱石アンドロイドによる朗読および解説、質疑応答、記念写真撮影の順番で進化した。アンドロイドサークルが本イベントで担当したのは、台本・音声作成と演出である。

台本については、本イベントでも羽二重団子の時と同様に俳句を入れた。用いた俳句は「夏瘦の此頃蚊にもせせられず」という句で、夏ということから選択した。また、7月27日は「土用の丑の日」だったため、正岡子規と鰻を食べたエピソードと、松山時代に漱石の家に遊びに来た子規が勝手に鰻を注文し漱石に支払いを押し付けたエピソードも盛り込み、現在性を強調することを試みた。台本の後半は、同窓会で披露するということから漱石と二松学舎との関わりについて、資料調査日を設けて図書館で全集や二松学舎関連の資料を中心に調査し作成した。漱石本人だけでなく、漱石と同時期に二松学舎で学んだ人の証言などから分かった当時の二松学舎の様子についても台本に入れている。このように、同窓会参加者に満足してもらえることを第一に目指し様々な要素を盛り込むことで台本を作り上げた。

本イベントで朗読したのは、『夢十夜』「第三夜」である。『夢十夜』「第三夜」を選定したのは、「第三夜」の怪談とも捉えられる内容が開催時期の夏に相応しいという判断からである。本イベントでは怪談要素を前面に出し、音声作成にあたっては全体的に少し低めのトーンで読むこと、登場人物の子供と大人を演じ分けることを心がけた。

これまでの朗読イベントでは、作者が朗読するということから演劇的な朗読は意識的に抑制していた。だが、今回のイベントでは敢えてエンターテインメント性を重視して演劇的な朗読を行うことを試みた。さらに、朗読だけでなく怪談的な演出も併せて行った。朗読を開始するまでは通常の照明だが、朗読が始まると暗転しLEDの蝋燭が1本ずつ順番に点灯し、そして朗読が終わると同時にまた蝋燭が消灯するという演出である。LED蝋燭のリモコンを持ったメンバーが客席に紛れておりそこから点灯・消灯の操作を行った。これらを行った理由は、漱石アンドロイドにはリアリティーよりも面白さのほうが期待されているのではないかと考えたからである。無論、「漱石」という建前があるため、話す内容に関しては実証的であればならないが、イベントの性質によっては話す形式が非日常的なものであっても良い。夏目漱石自身もユーモアを解するサービス精神のある人物だったこともあり、漱石アンドロイドのそのような振る舞いは夏目漱石の再現としての性質と矛盾しないだろう。今後も出演するイベントの性質によっては、作家としての朗読とは少々異なる朗読を実践していきたいと考えている。



松苓会での様子

4. オープンキャンパス

本年度も昨年度に引き続き、本学で8月と9月に行われたオープンキャンパスに出演した。8月18日に行われたオープンキャンパスでは『吾輩は猫である』、9月29日は1日2回出演し朗読を行った。9月の初回は『吾輩は猫である』、2回目は『夢十夜』「第三夜」をそれぞれ朗読した。今年のオープンキャンパスでは2年生の木村光之が『吾輩は猫である』の解説を

担当した。木村の解説は、語り手がなぜ猫なのかということについて漱石以前・以後のテキストを分析し『吾輩は猫である』の間テキスト性を論じたものである。

8月19日のオープンキャンパスでもこれまでのイベント同様に、「泳ぎあがり河童驚く暑さかな」という句を8月19日が「俳句の日」ということに触れながら台本に入れた。9月29日のオープンキャンパスでは9月29日が「招き猫の日」であるので、そこから『吾輩は猫である』につなげる



漱石アンドロイドポストカード

ということを行った。今日が何の日かということ、それに関わる漱石のエピソードを漱石アンドロイドが話すことで、リアルタイムで話しているかのように見せることを狙った演出である。

8・9月共にアンケートを実施したが、例えば、「漱石アンドロイドがただ座っているだけじゃなくて、人間らしい動き方をしていたのすごかったです。あと、案内をしてくれた学生さんがすごく優しくそれも含めていい大学だと思いました。」という意見など概ね好意的なものが多数だった。引用したアンケートのように、学生の振る舞いや学生が演出をしているという点を評価するものが多く、オープンキャンパスを訪れた高校生やその保護者に二松学舎を十分アピールできたと考えている。

また、オープンキャンパスでは漱石アンドロイドと漱石アンドロイドサークルについて説明するA4を三つ折りにしたカラー印刷のリーフレットを作成し配布した。また、アンケートにご協力いただいた方には、1年生の勝山聡太がイラストを担当したポストカードをお渡しした。リーフレット・ポストカードともに好評で、これらの配布は来年度も継続して行いたい。

5. 富山大学での出張講義

10月31日に行われた富山大学人間発達科学部の西田谷洋教授の授業内での出張講義（詳細は28～29頁参照のこと）にアンドロイドサークルからは、2年生の二木潤と4年生の大川香苗の2名が参加した。今回の台本は、サークルではなく山口直孝教授が作成し、事前準備でアンドロイドサークルは音声作成のみ担当した。朗読したのは昨年度も行った『ころ』だが、昨年度に用いた朗読音声をそのまま使うのではなく、新たに作り直した。作り直した理由は、『ころ』の音声は2018年度にアンドロイドサークルが初めて作ったもので、聞き取りづらい箇所や滑らかではない箇所が存在したからである。1年間の経験や習熟した技術を活かした、より人間らしい朗読音声を作成できたのではないと思う。

講演当日、大川香苗は司会、二木潤はアンドロイドの操作を担当した。初めて訪れる大学で緊張もあったろうが、2人は富山大学の学生から好意的に受け止められたようである。講演終了後、西田谷教授のゼミ生とアンドロイドサークルの学生が交流する時間が設けられ、アンドロイドを通じた学生交流を行うことができた。大川と二木によれば、富山大学の学生は二松学舎の学生よりも漱石アンドロイドに対し反応が良く、写真撮影時の距離も近かったとのことである。また、学生から大川と二木に対し、漱石本体の金額やメンテナンスのことなど漱石アンドロイド本体に関する質問があったのも新鮮に感じたようだ。二松学舎の教員・学生は漱石アンドロイドの特異性や違和感について慣れてしまっているが、外部の新鮮な反応を目の当たりにすることで改めて漱石アンドロイドの特異性を確認することができた。今後も、大学や高校など外部での講演も可能な限り対応し、積極的に学生間の交流を行っていきたい。

6. 漱石アンドロイドシンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？ 漱石アンドロイドを巡る3つの視点」

11月9日に行われた本イベント（詳細は14～19頁参照のこと）では、演劇時における漱石アンドロイドの操作およびイベント運営を担当した。漱石アンドロイドの操作については、富山大学同様に二木潤が行った。

漱石アンドロイドの仕組みとしては、最初に台本を作成し、次に音声を作成、そしてその音声に沿った動作をプログラミングしていくというものである。この動作をつける作業は、台本をどのように解釈するかという人文的なスキルが求められる。今回のシンポジウムで行った演劇でも、佐藤大氏が書き下ろした演劇脚本を一行ずつ解釈していき、どのような動作がふさわしいか考えながら動作プログラムを作成していった。漱石アンドロイドは事前にプログラムし自動で動かすだけでなく、手動でも動かすことができる。今回の演劇では、事前に決めた首の動きなど視線の多くを二木がその場で即興で行うという極めてパフォーマンス的なものであった。実態としては漱石アンドロイドを用いた高性能人形劇といえるか

もしれない。無論、漱石アンドロイドという存在のインパクトと、漱石アンドロイドに当て書きした脚本があってこそだが、漱石アンドロイドには人間の介在する余地が多分にある。この余地こそが漱石アンドロイドという存在の曖昧さと面白さを形作っているのである。

7. 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会 合同国際研究集会

11月24日に行われた三学会合同国際研究集会（詳細は26～27頁参照のこと）にて、漱石アンドロイドはシェイクスピア『マクベス』と、夏目漱石「マクベスの幽霊に就いて」を朗読した。アンドロイドサークルは台本作成と音声準備、当日運営を担当した。本節では英語音声作成について記述する。

漱石アンドロイドに英語を朗読させるのはアンドロイドサークルとしては今回が初の試みである。日本語音声を作成する時に使用しているソフトと、英語音声を作成する時に使用するソフトは異なるものであるため、最初は仕様を把握するのに苦労した。日本語音声作成ソフトは、音声のパラメーターが視覚的なUIのため感覚的に操作できるが、英語音声はすべてコマンドでプログラムしなければならず手間がかかる。英語音声作成を主に担当した4年生の桑原侑己によれば、『マクベス』は演劇なので登場人物ごとに話し方を変えること、ソフトの基本機能で表現できる感情は3種類だけだが、間の取り方や話速の調整を組み合わせたことで様々な感情を表現できるように工夫したとのことである。日本語音声作成で得たノウハウを活かしながら英語音声も作成していった。当日の観客の反応を見る限り、その工夫が功を奏して朗読は好意的に受け止められたようである。

漱石は『徒然草』の英訳も行っており、そういったものの朗読なども今後行えたらと考えている。

8. 国文学科推薦入学者向け説明会

2020年2月15日に行われた国文学科推薦入学者向け説明会に漱石アンドロイドサークルは、サークル紹介として登壇する機会を得た。今回は、漱石アンドロイド本体は登場させず、事前に撮影した漱石アンドロイドの動画を会場で流すことを試みた。内容としては、新1年生向けに、「私の個人主義」の一部を朗読するというものである。ビデオメッセージとはいえ、新1年生の反応はかなりよく、画面越しであっても漱石アンドロイドは十分インパクトがあるということを確認できた。

来年度は、漱石アンドロイドが『こころ』を朗読する動画をYou Tubeにあげ、それを高校の先生に授業で使用してもらうということを計画している。それ以外にも、漱石アンドロイドによる夏目漱石の生涯の紹介動画や、小説の名場面の朗読動画などをYou Tubeにアップロードするなど、来年度は、動画制作をアンドロイドサークルの軸に置いて活動していきたい。

9. おわりに

2019年度は、上記のイベント参加だけでなく、大川香苗がイラストを担当したLINEスタンプをリリースした。LINEスタンプは、大学生はどのような場面でスタンプを使うか調査し、その場面にふさわしい台詞を夏目漱石の書いた小説や手紙類から探し出してイラストを描くというやり方で作成した。12月12日に発売したスタンプは3月13日までに累計114個の売上があった。LINEスタンプは、漱石アンドロイドを知らない人に対しても日常会話の中で使用されるため、漱石アンドロイドの認知向上に役立つ。114人の購入者は、それぞれのコミュニティーのなかでスタンプを使用するため、そこで漱石アンドロイドという存在が拡散されていくはずである。今後も、イベント毎にLINEスタンプを告知し様々な人に使ってもらえるようにつとめたい。

また、今年度はアンドロイドが出てくる小説・漫画・アニメなどについてサークルメンバーが論じた論集『鏡像』を刊行し、11月の文学フリマで販売した。本論集は、日頃からアンドロイドに接している文学部の学生が、アンドロイドの出てくるテキストを「アンドロイドがどのように物語構造に作用しているのか」という切り口から論じたものである。アンドロイドという存在に正面から向き合った論集であり、文学部ならではの取り組みとなっている。

今年度、漱石アンドロイドサークルはNHKおよび鹿島建設広報誌から取材を受けた。これは、漱石アンドロイドサークルが学外からも関心をもたれる存在であることの証左ではないだろうか。アンドロイドを一般の学生が積極的に活用している大学は世界でも稀な存在であろうし、それが人文系というのも興味く映るのであろう。来年度も、積極的に新しい取り組みを進め、漱石アンドロイドを学生ならではの目線で活用し、アンドロイドと人間存在について考えていきたい。

「漱石アンドロイド」プロジェクト 2019年度 共同研究報告書
2020年3月31日初版第1刷発行

編集兼発行者 二松学舎大学 漱石アンドロイド運営委員会

印刷社 株式会社 サンワ

発行所 東京都千代田区三番町6-16
二松学舎大学
TEL : 03-3261-7407 FAX : 03-3261-1291
URL : <http://www.nishogakusha-u.ac.jp/>



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications
Research Institute International

学校法人二松学舎

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16 TEL 03-3261-7407